勇者の弟

水城りおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者の弟

【Ｎコード】
Ｎ０９２０Ｌ

【作者名】
水城りおん

【あらすじ】
イェーガーには双子の勇者がいる。そんな勇者の弟ルッツのエセ成長物語。
冒険者として旅に出てみたが何やら色々面倒な事に巻き込まれているような・・・？

01：イェーガーの勇者サマ

俺の住む国イェーガーには勇者と呼ばれる双子の兄妹いる。
兄は金髪碧眼のいかにも王子サマな外見のエリク＝ツェルニー。
妹は黒髪赤眼の可憐な外見のティアナ＝ツェルニー。
どちらも見目麗しい勇者だった。

この世界は千年もの昔、立った一匹の竜に滅ぼされかけたことがある。

暗黒竜とも呼ばれるその竜は、他の竜族を圧倒する力を持っていたという。
例えば一息で小さな街など簡単に燃え尽きてしまうというブレスを吐くだとか。
例えばその爪で小さな山など削り取られてしまうだとか。

はっきりいって現実味のカケラもないそんな言い伝えだけの存在。
親が子供が悪いことをしたときに悪い子は暗黒竜が来て食べられてしまうぞ、と脅しに使う程度の存在。

そんな存在が何故か突然沸いて出た。

普通は仰々しいお告げだとか予言だとか何かしら前触れってものがあっていいんじゃないだろうか。
しかしヤツは突然現れ、イェーガーの隣国のフォルクという国が一夜にして滅んだ。
フォルクはイェーガーほど大国ではなかったが決して小さな国でも

なかった。
その時初めて人々は言い伝えられていた暗黒竜の力が決して大げさでなかったことを知った。

そしてそれから七年の月日が流れ。
世界は滅びることなくそれなりに平和を取り戻していた。

それはもちろん勇者サマが暗黒竜を倒したから。
一国をも滅ぼした竜を倒した見目麗しい双子の勇者。
その人気は国内だけにはとどまらず他国にも熱狂的なファンが存在し、さらには熱心に崇拝する人間までが出てきた。

まぁそれは赤の他人であれば問題はない。
だがその勇者が身内となると話は別だ。

毎日際限なく届けられるプレゼントと称した色々な品々。
一般家庭の我が家におさまりきらず庭先にまであふれでた。
そして常に我が家の様子を伺っている熱狂的なファンや信者たち。
害意はなさそうなのだがとにかく鬱陶しい。
放置しておいたのが悪かったのか、タチの悪いことに記念と称して我が家の壁を削って持っていく輩まで現れた。
記念に何か欲しいと思うまではいいのだが明らかに器物破損だ。
そして誰かがやれば必ず真似をする人間が現れて。

日に日に薄くなっていく我が家の壁。
とうとう穴が開いた時、引越しを決断した。

家族は母と兄と姉と俺の四人。

母は王宮勤めをしていて住み込みで働いていたので兄弟三人だけで引っ越すこととなった。

勇者サマな兄と姉は簡単には人が近寄れない場所を新しい住処に選んだ。

断崖絶壁が美しいツィーレンという山の中腹。
そして一般には強敵と言われるはずの魔物が生息する場所。
間違っても普通は住もうと思うどころか近づこうともしない場所だ。

そんな場所に姉は、

「ここなら魔物も弱いしそうそう人も来ないし住みやすそうなところね」

と嬉しそうにほざき、兄はというと、

「ここは景色もいいし落ち着くなぁ」

と絶壁の上でのんびりと昼寝をしていた。
勇者ともなると感覚が普通とはかけ離れているらしい。

当時の俺は１０歳でごく普通の子供。
つまり勇者の弟であっても能力は一般人と同じ。
鬱陶しいストーカーのファンや信者から逃れることはできたが常に命の危険と隣り合わせとなった。

伝説級の戦闘力の兄と姉からみれば平和な場所で、一般人の俺は常に命の危険を感じながら必死に生きてきた。

そんな必死の努力の甲斐もあって、俺は１７歳となった今それなりに力がついていた。

02：冒険のはじまり

「ルッツ、どうしても行くの？世界を見て回るだなんてまだ早いんじゃない？」

目に涙を浮かべながらそう問うのは見た目だけなら可憐な姉。

「ルッツだってもう子供じゃないんだ。ずっとこの山の中では世間知らずのままだよ、ティアナ。それに今のままじゃ友達のいないかわいそうな子になってしまうんだよ？」

やさしく姉を諭しながら酷い事を言うのはにこやかに王子スマイルを浮かべた兄。

「友達ならカッツェがいるじゃない！この子だって立派な友達よ！」

そういって抱きしめているのは先日どこでか捕縛してきたであろう真っ白な竜の子供。

本人は親に託されたなどと寝言を言っていたのだが。

「ティアナ・・・ルッツだって年頃なんだ。色々と察してあげないと・・・」

「・・・あっ、そうなの？そうよね、ルッツだって男の子だものね・・・」

明らかに勘違いして気を使われた。

「ルッツ、まず街に着いたら冒険者として登録するんだぞ？登録の仕方は・・・」

「まってエリク。その前にギルドの場所の説明をしないと！ギルドはね、街の広場から西に行った青地に銀の文字の看板で・・・」

ギルドの説明は３０分続いた。
説明の中には変な人についていかないようにだとか落ちているものは口にしないようにだとか、明らかに不要な説明も多々あった。
そもそも落ちているものは相当飢えでもしなければ子供でも口にしないだろう。

断言できる。

この兄や姉の面倒を見てきたんだから常識は2人以上にあると。

「そうだ！ルッツ、大事なことを言い忘れてたわ！」
「何？姉さん」
「街へは家を出てからまっすぐ南に山を降りて・・・」
「・・・・もう行きます。」

我が家が建っているのは断崖絶壁のやたら見晴らしのいい場所でミモレットという名の街も遠くにだが見える場所で、説明されなくてもわかる。
それに何度か兄や姉と街に買い物に行ったことがある場所なのに。
長くなりそうなのでさっさと家を出ることにした。

「たまには顔を出しに来るんだよ？あと母さんにも・・・」
「わかってるよ。それじゃ、行ってきます」

こうして俺は冒険者としての第一歩を踏み出した。

家を出たのが昼前だったので昼にはミモレットへ到着した。
所詮家から見える場所だったしこんなものだろう。
今更ながら一人で山を降りて街に来たのは初めてだったりする。

・・・どんだけ過保護だったんだあの人たち。

「えーっと、ルッツ＝ツェルニーさんですね。ではここにサインを。」

ギルドの受付で出された登録の申請書類にサインをする。

「はい、これで手続きは完了です。これでギルド連盟に登録されましたのでどこの街のギルドでも依頼を受けることが可能となります。簡単な依頼をこなして徐々にランクを上げることをオススメします」
「ありがとうございます。」

受付嬢から登録証を受け取り依頼の張り出されている掲示板を眺める。
数ある仕事の中でも初級ランクは、迷いネコの捜索だとか子供の面倒だとか冒険者に頼む必要もないんじゃないかというものが多く目立つ。
まぁ冒険者の登録なら誰でもできるのだから妥当なのかもしれないが。
その中から隣町までの護衛、という冒険者っぽい仕事を発見し早速

依頼を受けることにした。
運の良いことに本日の夕刻が受付期限で、ちょうど依頼主がこれからギルドに来るところだという。
奥の部屋に通され、しばらく待つと受付嬢が一人の男性と俺と同じぐらいの歳の少女を連れてやってきた。

「ルグラン様、こちらが今回依頼を受けることになったルッツ＝ツェルニーです」
「ルッツ＝ツェルニーです」

受付嬢に紹介されたので軽く会釈をする。

「私が依頼主のオーバン＝ルグランです。こちらは娘のレティシア」
「レティシア＝ルグランです。レティと呼んでくださいね。ルッツさん、よろしくお願いします」
「俺もルッツと呼んでください。こちらこそよろしく」

簡単な紹介の後受付嬢は退室し、依頼の確認をすることとなった。

依頼の内容は娘のレティシアを隣町のサンタンドレまで送り届けるというもの。
隣町までは馬車で半日ほどだがどうしても馬車の都合がつかなかったと言う。
徒歩で行けば2日間ほどかかるのだが、比較的安全だといわれている場所とはいえ娘一人で行かせるのも心配だということで、とにかく冒険者を護衛に付けようということになったらしい。

「ところで・・・ルッツ君といったね。君はあの勇者に憧れて冒険者になったんだろう？本当に大丈夫なのか・・・？いくら比較的安

全な道のりだとはいえ一人娘を預けるのだから・・・」

ルグランさんの心配。それはきっと俺の名前の事だろう。
「ツェルニー」これはあの勇者サマと同じ姓。
つまりルグラン氏は俺が勇者に憧れてツェルニーを名乗っているのだと思っているらしい。

これには俺も思い当たることがある。
暗黒竜を倒して兄と姉が戻ってきてすぐのこと。
何故か親族が増えていた。
今まで会うどころか名前すら聞いたこともないような親族が家にやって来たりした。

街に出たときには自慢げに男が話していたのを聞いたこともあった。
「俺はあの勇者の祖母の従弟の娘の婿の甥っ子で・・・」

それは立派な他人だつっこみたかったが係わり合いになりたくなかったので放置した。
そもそもそれ自体が本当かどうかも怪しいわけで。
あまりにも有名な兄と姉と街の外で別れて買い物をしていたときにそんな光景をたくさん見てきた。

俺はそんな人間と同じに見られているらしい。

「ツェルニーは本名です。残念な事に」
「・・・そうか、それはすまなかった。気を悪くしないでほしい」
「いえ、娘さんを心配しての事ですから気になさらないでください」

俺がよほど暗い顔をしていたのかルグランさんに謝られてしまった。
しかし本当に、他人であったらどれだけよかっただろう。心からそう思う。

出発は早いほうがいいとの事で、明朝となった。
それから簡単な打ち合わせをしてルグランさんたちと別れた。

その日の夜。
手近な宿をとった俺は、初めての静かな夜を満喫していた。
酔っ払いの叫び声程度、魔物のうなり声に比べれば気にもならない。
そんな魔物のうなり声も今では大して気にならなくなったいたりするのだが。

０３：旅立ちの朝

何事もなく朝がきた。

見た目だけ可憐な姉の愛の抱擁とかいう朝の挨拶もなく。

訓練と称した兄の襲撃があるわけでもなく。

俺が家を出たのは間違いではなかったとしみじみ思う。

待ち合わせは村の広場。

俺が着いたときにはすでにレティが待っていた。

「おはよう！ルッツ」

「おはようございます、レティ」

昨日の大人しそうなイメージとは全く違うレティがそこにいた。

「一緒に旅をするんだから、堅苦しいのはナシにしましょ！だからルッツも普通に話してね？」

「いや、でも一応依頼主なんだし・・・」

「あたしそういうの苦手なのよね。昨日は父様の前だったから大人しくしていたけど・・・」

そういうレティは昨日のワンピースから一転して動きやすそうな旅服で長い黒髪をサイドで結って活発そうな雰囲気になっていた。

「まぁ・・・そのほうが俺としても有難い・・・かなぁ」
「うんうん。いざとなったらあたしが守ってあげるから」
あははと笑うレティの腰には大振りの剣。
「レティ・・・その剣はもしかして・・・」
「あーこれ？ツヴァイハンダーよ。学校でも使ってるの」
「それって両手剣・・・そんなの扱えるの？」
「これって見た目より軽いから大丈夫」
そう言ってレティはすらりと剣を抜き片手で振り回した。
片手で。
ツヴァイハンダーは決して軽い剣ではない。むしろ重い部類にはいる。
決して普通の女の子が片手で振り回せるようなシロモノではない。
姉は除外して。
そして俺は直感した。
レティは姉と同類だ、と。
「とりあえず確認させて欲しいんだけど・・・レティって学生って言ってたけど・・・」
「学生よ？騎士学校の」
レティの剣は飾りではなく、ヘタな冒険者よりよっぽど強いと本能

が告げていた。
いくら一人娘で心配だといっても護衛は必要なかったと思います、ルグランさん。

「依頼を受けてくれる人が見つからなかったからしょうがないから一人で行こうと思ってたのよ？一人で2日間も歩くの暇だなぁって思ってたの。よかった、ルッツが来てくれて」

ルグランさん。俺、護衛だと思われていないみたいです。

サンタンドレまではずっと街道沿いを歩くだけ。
馬車が通る為に整備された道だ。
サンタンドレには行った事がないが・・・よく考えれば街もミモレット以外に行った事はない。
冒険者としていろいろどうなんだろうとは思うが。

街道は馬車は通るが本数も知れているので人気も少ない。
魔物が生息している森も離れているので魔物に襲われることもほとんどなく、野党の類が稀に現れるぐらいらしい。

「ねぇねぇルッツ！なんか野盗がいるっぽいんだけど！」

やっぱり俺は運が悪いらしい。
そしてレティはやたら嬉しそうだ。

「ここはあたしの出番よね！ルッツは手をだしちゃダメよ～出したら護衛クビだからね！」
「俺の仕事を全否定する発言はやめてくれ・・・そして発言内容がおかしいことに気づけ」

ざっと見て敵は5人。隠れているつもりだろうが気配でバレバレなのだ。

「学校の実技でゴブリンの群れの真ん中に落とされることに比べたらなんてことないわね」

すらりと剣を抜いて先を見据えるレティ。
ゴブリンの群れって普通５０匹以上いるんだが・・・その真ん中って。
騎士の学校って厳しいんだな・・・

「どっせーいッ！」

あまり女の子らしくない掛け声でレティが剣を振るう。
剣からはすさまじい衝撃波が発せられ隠れていた盗賊をなぎ倒した。

念の為だが、レティの剣は普通のツヴァイハンダーであって魔法剣だとかそういうシロモノでない。
決して振るえば衝撃波がでるような仕様ではない。
そして俺が魔道師でもあるからわかることだがレティに魔力はない。
まったくのゼロ。皆無だ。

つまりあの衝撃波はレティが剣を振るって起きた衝撃波なのだ。
ホンキで護衛が必要なレベルじゃないぞ・・・どんだけ親バカなんだルグランさん。

後で知った事だが、ルグランさんの依頼を誰も受けなかった理由。
それはレティが有名すぎるからで、いざ激しい戦闘になった場合初

級の冒険者などその衝撃に巻き込まれてただじゃすまないということだった。
騎士学校でも主席の将来有望視されている期待の新人でゴブリンの群れの実技もレティのみの特別仕様だった。
やはり姉と同類で間違いなかった。

野盗も相手が悪かったとしか言いようがない。
そんなワケで俺は何もすることなく野盗は討伐されたのだった。

「ルッツ、あそこ・・・子供がいる」

レティが指差した先には小さな子供。まだ5・6歳といったところか。

「まったく気配がないってどういう子供だ・・・」

その子供はまるで自然の一部といったようにまったく気配がなかった。

「それにすごい綺麗なシルバーブロンド。なんかルッツに似てない？」

子供と俺を交互に見比べながらレティが言う。
確かに俺はシルバーブロンドだが・・・似てるといわれてもピンとこない。

「とにかくこんなところにほっとけないから一緒に連れて行こう！」
「まぁほっとくわけにもいかないが・・・その子供・・・普通じゃないだろ」

あからさまに怪しいんだが。
悪意は感じられないがとにかく怪しい。

「ほらールッツ、置いていくよ？」

振り返ればすでに子供の手を引いたレティが歩き出していた。
不用心すぎるだろ・・・

「にーちゃ、いこー」

子供に手を差し出された。
レティとエセ親子のように子供と手をつないで先に進む。

子供の名前はヴァイスというらしい。
なんかどっかで聞いたことがある気がするし、この微妙な気配もどこかで会った事があるような気がしたが思い出せない。
それ以前にあの特殊な兄と姉から解放されて喜んでいたはずなのに、仕事で出会ったのが姉の同類という事実のほうが俺には重要だった。

「類は友を呼ぶんだよ」

そんな兄の声が聞こえたような気がした。

０４：夜の来訪者

野党に襲われて（襲って？）からは何事もなく順調に進み日が暮れようとしていた。
予定では手近な場所を見繕って野宿をすることになっている。

見た目からは想像もつかない攻撃力を誇るレティと相変わらず気配のない白い子供のヴァイスと俺。
きっとぱっと見は女子供を連れた駆け出しの冒険者、というところだろう。
野党や魔物から見ればいいカモに見えるということだ。
見張りも無しに休むのは不用心すぎるのだが・・・俺は魔術師であって肉体派ではないので小細工をしておく。

野宿をするのは街道からすこしだけ外れた場所にある大きな木の下に決まった。
そこで俺は近くにあった枝を拾いガリガリと木を中心にすこし大きめの円を描く。

「ルッツ、何してるの？」
「ん、見張りするのも面倒だから結界を張ってる」
「へ～、ルッツって盗賊なのに結界を張れるのね」

円を描いていた手を止めてレティを振り返る。
どうやら冗談を言っているような様子もなくそれが素であるとわかる。

「レティ、人に見る目がないとか天然だとか言われたことない？」
「・・・何でわかるのよ。ルッツって占い師？」

「んなわけない」

俺の服装は一般的な旅服よりはすこしかっちりしたタイプで騎士などの軍服に近いデザインだ。
確かに俺の持ち歩いている武器はショートソードのみだが一般的に盗賊といわれる職業の人間とはかけ離れた服装のはずだが。
しっかりマントも付けているのだ。身軽さが重要となる盗賊でマントをつける者はそうそういないだろう。
盗賊と一致するとすればショートソードのみ。どうやら武器だけですべてを判別しているようだ。

「俺は魔道師だ。見て分れとは言わないが武器以外も見て判別してくれ・・・」
「魔力の有無がわからないから総合的にみて盗賊だと思ったのに」

レティの呟きは聞こえなかったことにして円を完成させて魔力を込める。
魔力に反応して地面に描いた円が一瞬微かに光を帯びる。

「一瞬青白く光った！なんだかよくわかんないけどすごいねー」

これで準備は完了。
侵入者があれば結界がそれを教えてくれる。そして弱い魔物であれば結界を越えることすらできない。
この辺りであればこの程度で十分だろう。

荷物から毛布を取り出しすでにうとうとしているヴァイスにかけてやる。
もともと2人だけの予定でしかも1泊で到着する予定だったので余分に毛布を持ち合わせてはいない。

「ルッツはどうするの？」
「別に俺は毛布がなくても問題ない」
「うーん、何なら一緒に入る？」

ヴァイスを寝かせ、その隣に横になったレティがぺらっと毛布をめくって問う。

「・・・それならヴァイスと一緒に毛布を使うほうが普通だと思わないか？」
「そういえばそうかも？」
「せめて俺を男扱いしてくれ・・・」

警戒心がなさすぎる。いくら強くても女であるのに。
どうやらレティは根本的にいろいろ問題があるようだ。

・・・ルグランさん、心配するところが違ってるみたいです。

妙な気配で目が覚めた。
結界に異常があったわけではないが、妙な気配がした。

「・・・・・何か、きた」

ちらりとレティに目をやるとすでにレティも気づいていたようでいつでも剣を抜けるようにヴァイスを庇いながら構えていた。
本当に頼もしい依頼主サマだ。
ただこの気配・・・俺の思い違いでなければかなり厄介な相手だ。

急いでヴァイスの周りに強めの結界を施す。

「参ったな・・・なんでアイツが・・・」

「アイツって何？なんだかすごく嫌な感じがするんだけど」

野党が来たほうがよっぽど楽だと思える相手。

どんどんと増す重圧感。

それが俺の予想が正しかったことを意味している。

「レティは竜と戦ったことってある？」

「ドラゴンと？もちろんあるわけないじゃない」

「デスヨネ」

「ちょっとまさか・・・」

ひっじょーにマズイ。そのまさかなのだから。

俺は戦ったことはあるのだがその時とは状況が違いすぎる。

一人で戦うのと何かを守りながら戦うのでは勝手が違いすぎる。

ゆらり、とヤツが現れた。

「ちょっとルッツ！黒いんだけど！」

「そりゃ黒竜だし黒いさ」

「ブラックドラゴンって・・・ドラゴンの中でも上位の攻撃種じゃない！！」

それでも怯まず剣を構えるレティはさすが騎士のタマゴとでも言うべきか。

できれば逃げてくれるとありがたいのだが、守る対象のヴァイスがいる状態でレティが素直に逃げてくれるとは思い難い。

「レティはヴァイスのところに。強めの結界を張ったからそこでじっとしてて」
「何言ってるのよ！あたしだって・・・」
「俺は竜と戦ったことがある。それにどちらかがヴァイスを守らないといけない。」
「でもっ・・・」

レティの瞳が揺れる。もう一押しか。

「騎士は人を守る存在のはずだ。それが使命なんじゃないのか？」
「うー・・・わかったわよ。なにかあったら飛び出すからね！！」
「いや、その場合は即逃げろ」

しぶしぶだが納得したようでレティが一歩下がる。
さすがタマゴとはいえ騎士。守るだとか使命だとかという言葉に弱いらしい。

ピリリと衝撃が走る。
黒竜が結界を越えた衝撃だ。

「さてと。それじゃ仕事だし、やるしかないか」

俺は現時点での唯一の武器であるショートソードを構えて一歩前に踏み出した。

０５：黒竜襲来

黒竜。一般にはブラックドラゴンと呼ばれるドラゴン種の中でも上位の攻撃種だ。
攻撃方法は主に爪や牙などに加え炎のブレスなど。
しかしその攻撃力は一番遭遇率の高い緑竜に比べると大人と子供ほどの差があるという。
間違っても駆け出しの冒険者が対峙するような相手ではない。

そもそも街道に竜が現れるなんてまずないだろう。
竜の出現するような場所に街道を作るだなんて危険極まりない。
よほどの理由がない限りはありえない話だ。

つまり今何故黒竜が目の前にいるのかというと。

「非常識すぎるだろ、ヴォケーッ！」

兄や姉といいこの黒竜といい、非常識すぎる。
非常識なんて大嫌いだ。

俺の心の叫びなど竜に通じるわけもなく、ジリジリとこちらとの距離を縮めてくる。

「聖雷破（ハイリッヒ・ドンナー）！」

青白い雷が黒竜を包み込む。
聖なる雷を相手に放つこれでも上級に分類される呪文。

しかしバチリという音がしただけで平然とこちらに歩み寄る黒竜。

うん、全然効いちゃいねぇってことですね。
すでに黒竜との距離は数メートル。

「ルッッ！！」
「大丈夫ッ・・・そこから動くなよっ・・・と」

黒竜が勢いよく尻尾を叩きつけてくる。
当たったら悲惨なことになるのが目に見えている攻撃。とっさに横に飛んで避ける。
しかしそこへ尻尾の回転の勢いを使った黒竜の爪が振り下ろされる。
避けるのは間に合わない。ならば受けとめるか受け流す！

「光刃剣（リヒト・シュヴェルト）！」

物質に光の刃を纏わせるという俺の得意呪文。
そこらの剣よりもよっぽど切れ味が良く刃を纏わせた物質の重さという素敵な剣が出来上がる。

ぎんっと金属同士がぶつかり合うような音をたてる爪と刃。

「おわっ！」

反らしきれなかった力を受けてバランスを崩してしまった。
次の攻撃受けられるかな、などという考えが頭をよぎった瞬間。

『グルッ・・・』

黒竜の口元に生まれる熱源。
黒竜の顔はレティ達の方向を向いている。

「ちぃっ・・・・！」

結界があるとはいえあの炎を受けてはただではすまない。
呪文を唱えつつレティ達の元へ向かう。
間に合うか・・・？

『ガアァッ！』

呪文の完成よりも早く黒竜のブレスが吐き出される。
レティ達を守るものはブレスに対するには薄すぎる結界のみ。
いくらレティでもこれはどうにかできるレベルじゃない。

「装甲障壁（パンツァー・シルト）！」

それまでしていた詠唱を中断して強制的に呪文を発動させる。
威力は落ちるが多少なりともブレスを防ぐことができると信じて。

「・・・ッ！！」

レティが息をのむのがわかった。
頭の奥でチカチカと危険信号が鳴っている。
レティ達が炎に飲み込まれるというその時。

俺の障壁呪文もろともブレスが真っ二つに割れて。

「まだまだね」

悪魔の声がした。

06：救世主？

真っ二つに割れた障壁とブレス。
それはまさに斬られたというのが正しい。
そんな常識を無視したことをできる人間を俺は一人しか知らない。
そして聞こえた悪魔の声。間違いなくあの人だ。
「ルッツ、この辺りは俺が結界を張るから周りのことは気にせず黒竜を」
もう一人の悪魔の声。やっぱりいやがったか・・・！
しかしあの悪魔の張る結界ならばどんな無茶をしても大丈夫。
そして俺は心置きなく自身の扱えるであろう最上級の呪文を唱える。

「やれ」

それは結界が完成したことを告げる声。
すぐさま完成した呪文を展開させる。
「霊崩破（ガイスト・フェアファル）！」
俺が使えるであろう最強呪文。
黒竜が対抗すべくブレスを吐く。
俺の手から放たれた青白い光の衝撃波と黒竜のブレスが衝突する。
「いけっ！」

物理的な威力も十分高いのだが精神面からのダメージを与えるのが特徴のこの呪文。
精神面への攻撃に鎧や硬い皮膚などなんの意味も持たない。
衝撃波はブレスを掻き消して黒竜を飲み込む。

激しい爆音とともに砂煙が巻き上がった。
やったか・・・？
これで倒せてなかったら正直キツイなぁと思いつつ、念の為次の呪文をすぐに展開できるようにしておく。

「まったく、要領が悪すぎる」

砂煙の向こう側。
動かなくなった黒竜をぺちぺちと叩きながらため息をつく勇者の片割れの兄・エリク。

「竜牙砕（ドラッヘ・バイセン）！」

兄エリクの呪文によって倒れた黒竜の周りの地面が牙の形をとって盛り上がり黒竜を飲み込む。

「よし、スッキリ」

地面が元の形に戻った時には黒竜の姿は消えていた。
そこで俺もそれまで組み上げていた呪文を中断し、ほっと一息つく。

「ちょっとルッツ！！」
「あぁレティ・・・ごふぉッ！」

呼ばれてそちらに振り返ると同時に背中に強い衝撃を受け倒れる。
見上げるとそこには興奮した様子のレティ。
どうやら思い切り肩でタックルされたようだった。

「女の子が興奮のあまりタックルするのはどうかと思う・・・」
「そんな些細なことはどうでもいいの！それよりどうしてココにイェーガーの勇者がいるのよ！」
「それは・・・」

俺の名前から察してくれ、と言おうとしたのだがその言葉は遮られた。

「ルッツは私達のかわいい弟なのよ」

自分の身の丈よりも大振りの剣をもつ姉、ティアナがにっこりと微笑んだ。
見ればわかるだろうが姉が剣士で兄が魔道師だ。

「・・・ウソ・・・・・」
「嘘だったらどれだけ幸せだったか・・・」
「じゃあツェルニーって本当に本名だったの？」
「信用してなかったのか。ひど・・・」

酷い。その言葉はやっぱり遮られることになる。

「酷いのはルッツでしょう！こんなにも愛情を注いでいるのにッ・・・！」

数メートルの間合いを一気に詰めた姉の制裁が下され俺は地面に沈んだ。

０７：最凶の兄と姉

「ルッツの姉のティアナ＝ツェルニーです」

にっこりと微笑んでレティの手をとる姉。
みるみる真っ赤になるレティ。
同性であっても姉のあの笑顔はかなりの効力がある。本人もわかっていてやっているのだからタチが悪い。

「あたしはっレティシア＝ルグランですっ！今回ルッツの依頼にゅしやってまひゅ！」

・・・かみまくりだし。

「面白い子だね。僕は兄のエリク＝ツェルニー。よろしくね、レティシア」

王子スマイル全開で微笑む兄。
コレで大抵の女の子は鼻血でも噴きそうなぐらい真っ赤になる。
もちろん確信犯。真っ赤になるのを見るのが楽しいらしい。

見た目に反して二人とも中はかなり真っ黒。
もちろん俺にはあの笑顔は胡散臭いとしか思わない。

それでもその実力は事実で、世界を救ったというのも事実。
多くの人を魅了する笑顔と勇者の功績。
多少の妬みなどは受けるが基本的に評価は高い。

その高すぎる評価で俺が迷惑を被るのもまた事実。
それはただ単に優秀すぎる兄や姉と比べられるというものだけでなく。
あの笑顔の裏では俺に対して愛情という名の嫌がらせのような仕打ち。

姉はやたら俺にスキンシップを求める。

しかしそのスキンシップは自分の身の丈よりも大きな剣を片手で振り回すほどの腕力で繰り出される。
吹っ飛ばされるなんて日常茶飯事。内臓まで逝きかけたことだって何度もある。
愛情に押し潰されるのも時間の問題だった。

俺は必要に迫られて回復魔法を覚えた。

回復魔法は神聖魔法に分類されるのだが俺はかなり相性がよかったらしく、どんどん呪文をマスターしていった。
しかしそれが次の悪夢への始まりだった。

魔法の才能を魔法師の兄に目をつけられて、突然魔法攻撃を仕掛けられるようになった。
姉よりもこっちのほうがきつかった。

兄は基本的に攻撃系の魔法である黒魔法しか使えない。
しかも黒魔法のなかでも派手で破壊力の高いものが得意で。
まともに食らえば死ぬだろうというものばかり。

「ゴメン。俺って加減とかって苦手なんだよね」

その一言で片付けられ、ほぼ全力だろう魔法を放たれた。
それでいて結界は得意なので周りには被害は出ないし気づかれることもない。
兄の訓練は姉の愛情よりも死に近い過酷なものだった。
誰も兄の訓練を目撃することがないので、どんなにボロボロになってもその傷が兄によるものだとは信じてもらえなかった。

勇者と呼ばれる最強の兄と姉は俺にとっては最凶でしかない。

決して嫌いなわけではない。
ただ関わるとろくなことにならない。だから最凶。

そんな兄と姉は依頼主と楽しげに会話をしていた。

０８：偶然と必然

「で、兄さん姉さん。どうしてここに？」
いつまでも続く談笑を遮って疑問を問う。

「あー。念の為に言っておくが、別に一緒にお前を探していたわけじゃないぞ、ルッツ」
「ええ。私は別の子を探していてここに来たんだもの。でも途中でルッツに会えるなんてさすが愛よね」

さも一緒に俺を探していたと思われるのは心外だと否定する兄。
否定しながらも家族愛を主張する姉。
兄はともかく姉がここにきたのは偶然ということらしい。

「じゃあ兄さんは俺に何か用があった？」
「あぁ。母さんから伝言を預かっている」

俺達の母親は仕事で王宮勤めをしていて普段は家にいない。
あの二人（一応俺もだが）の母親だけあって少々特殊だ。
きっとろくな用件じゃないだろう。

「至急母さんの所へ来いってさ。わざわざ水鏡を使って連絡してきたからかなり早急な用事みたいだよ」

水鏡とは主に王宮や神殿などに設置してあるお互いの姿を映し、会話することができる通信用の魔道具で我が家にも何故かあった。
勇者の家だからだとからしい。
しかし緊急時以外は手紙を使うほうが多い。理由は単に魔力コスト

が掛かる為だ。
今回はかなり急を要するということに間違いないらしい。

「・・・依頼が終わったら行くよ。で、姉さんは誰を探してたんだ？」
「カッツェよ」
「カッツェ？」

聞き覚えのある名前。
・・・確か姉さんが捕縛してきた白竜の子供だ。

「家の裏で遊んでいたら姿が見えなくなっちゃったのよね」

家の裏。つまりはあの強力な魔物が住む山のことだ。
俺も魔物に何度か襲われ食われかけたものだが・・・

「あの魔物だらけの山で遊ばせたって・・・それって食われ・・・」
「違うわ。ちゃんと見つけたもの。ほら、そこにいるじゃない」

姉の指差す先にいるのはヴァイス。

「さぁカッツェ、家に帰りましょう」

姉が手を差し伸べるとヴァイスはさっと俺の後ろに隠れる。

「やっ、にーちゃと一緒にいる！」

確かに強力な力を持つ竜は人の姿をとることができるようになるらしいが、そんな竜に遭遇する機会など皆無に等しいので世間ではただの伝説の類だと思われている。

しかしこのヴァイスは白竜の子供のカッツェだという。
言われてみればカッツェの気配、のような気がする。・・・言われるまで気づかなかったけど。

「んー・・・どうすれば？」

後ろに隠れるヴァイスの頭をなでつつ姉に向き直る。

「カッツェのことをカッツェのお母さんから頼まれてるのよね・・・」

「それ寝言じゃなかったのか・・・」

「ルッツ酷い！信じてくれてなかったのね！」

大げさによよよと姉が泣きまねをする。
寝言だと思っていたが本当だったのか・・・？
存在自体が伝説級の白竜に子供を託されるとか、これが勇者補正か。

「黒竜たちに狙われているからだったんだけど・・・間に合ってよかったわぁ」

元凶は姉。
・・・本来こんなところにいるはずのない黒竜に、偶然運悪く出くわして襲われたのかと思ってちょっと凹んだのだが、やっぱりそんなすさまじく運の悪いことなんてあるわけがなく必然だった。

やはり兄や姉が関わるとろくな事にならない。

09：黒竜対策

間に合った、と姉は言うのだが。

「俺がいなかったら間に合ってないじゃないか」

「結果がよければいいのよ」

これ以上何か文句を言えば殺す、そんな笑顔で微笑まれた。

ひやりと冷たいものが背中をつたう。

わかってはいる。俺は兄や姉には勝てないと。

「でもどうしたものかしら。カッツェがルッツと一緒にいたがるなんて・・・また他の黒竜がくるだろうし・・・」

心底困ったように姉が言う。

こちらとしても行く先々で黒竜に襲われるのは勘弁してほしい。

だが、うるうるとこちらを見つめるヴァイスを姉につき返すのも気が引ける。

決して俺が甘いからそう思うのではなく、あの兄と姉と一緒にいるのが気の毒すぎるのだ。

長年一緒に生活してきたからこそ言える。あれはキツイ。

「何だ？黒竜に見つかるのがまずいのか？」

「そりゃ・・・俺は守りながら戦うのは苦手だし、街中なんかで出くわしたら街にも被害がでるだろうし」

「それなら常にその竜に結界を張り続けていけばいいだけじゃないか」

「それ普通は無理だから」

さらっと人外なことをしろと言われた。
結界を維持して移動するのはかなりの高等技術で、そんなことをさらっとできる人間は数えるほどしかいないだろう。ちなみに俺は結界は張れるが苦手な部類だ。
そもそも常に結界を張り続けるということがキツイ。

「しょうがない、コレを使うか」

兄が取り出したのは白濁色の小さな石のついたペンダント。

「あら？それって結界石じゃない？」
「あぁ。先日野盗に襲われたから反撃ついでにアジトまで壊滅させたんだが、その時に野盗のアジトで見つけたんだ」

兄を襲うとはなんて気の毒な野盗。
ついでで壊滅させられたとは思ってもいないことだろう。自業自得なのでどうでもいいが。
そして笑顔で野盗を壊滅させている兄が脳裏に浮かぶ。

「えっと、結界石って何？」
「あぁレティは知らないのか。結界石ってのはその名前の通り結界を張る時に使う石で、結界を維持するために使う物だよ。ちなみにかなりの高級品」
「高級品ってどれぐらい？」

今まで静かに話を聞いていたレティがひょっこりと後ろから覗き込んでいた。
結界石なんてそうそう目にするものじゃないし、あまり知られていないのだろう。

「そうねぇ、これなら王都に豪邸が建つ程度かしら」
「うえっ、本当ですか！？すごーい・・・」
そのまま姉とレティは装飾品がどうとか服がどうとか、女性の好きそうな話題で盛り上がっていた。
とりあえずそういう話には関わらないほうが得策なので放置する。
「コレにこうして・・・」
兄が呪文を唱えるとぱぁと光の輪が2つ兄の周りに現れる。
呪文の種類にもよるし、他の人間でも同じようになるが兄はそれがやたら様になっている。
「うん、完成だよ」
光はすっかり収まっていて、結界石はほんのり青みがかった色に変化していた。
それを兄がヴァイスの首にかけてやると、ふっとヴァイスの気配が変わる。
それはまるで普通の子供のような気配。
「これは？」
「白竜の気配だけを隠すようにアレンジした結界。これならこの結界石でも十分だ」
「アレンジって・・・」
「簡単なものだからね」
ウインクをしながら答える兄。
弟に色目を使ってどうするとツッコミたいところだが、呪文アレン

ジの難しさはわかるのであえてスルーしておく。
決して兄の報復が怖いわけではない。・・・多分。

１０：姉＞兄

さて、と兄がこちらに向き直る。

「それじゃ、用事も済んだことだし俺は戻るよ」

よし、すぐ帰ってくれ。
そう思っても言葉には出さないが。

「ティアナも、もう黒竜の心配はほとんどないんだから一緒に戻るぞ」
「そうねぇ・・・エリクと一緒に戻ったほうが早いし、カッツェもルッツと一緒がいいみたいだものね」

ぱっと姉が振り返る。

「ルッツ、私達は戻るけどちゃんとレティちゃんとカッツェを守るのよ？」
「わかってるよ」
「そうだな、『助けて兄さん！』って叫べば助けに来てあげるよ」
「遠慮します」

危ない時に叫んでどうやって気付くのか、むしろ間に合うのか気になるが、あの人たちなら来るだろう。
間違っても叫ばないようにしよう。

「それじゃあまたね」
「あ、はい」

さすが兄さん、レティに声をかけるのを忘れない。
これが天然王子たる所以だろう。
兄がトンと杖で地面を突くと、ぱっと足元に魔方陣が展開される。
転移魔方陣だ。
呪文の詠唱なしで発動させるのを見るたび、俺とは次元が違うと思い知らされる。

あっという間に二人の姿が消え、とたんに辺りは静けさを取り戻した。

「そうだヴァイス。どうして名前をカッツェって言わなかったんだ？」
「だってヴァイスはヴァイスだもん。カッツェもだけどヴァイスも名前なのー」

カッツェは姉が勝手につけた名前だろうからヴァイスが本名だということだろうか。
なら呼び名はヴァイスのままでよさそうだ。
そう思案していると、後ろでレティがほうっと息をつく。

「色々驚きすぎて疲れちゃった。あはは」
「確かにね、お疲れ様。それはそうと気になってることがあるんだけど」
「ん、何？」

気になっていること。
姉さんには最初緊張してかみまくっていたのに兄さんにはまったく無反応だったこと。
今まで見てきたなかで初めての反応だった。
大体の反応は姉には緊張しすぎてまともに話せない人ばかりで、兄

には真っ赤になりすぎて倒れる人が続出するとかでやっぱりまともに話している人を見たことがない。
尋ねてみるとすごく不思議そうな顔をされた。

「ティアナさんには憧れていたから。同じ女の人で剣士なのにとっても強くて素敵なんだもの」
「素敵・・・か？」
「一般的に見たらかなり素敵なの！」

弟の立場からだと、危険極まりない家族愛をぶつけてくる人間で素敵とは程遠い存在だ。
他人という立場がうらやましい。

「でもお兄さんは強くてかっこいいんだろうけど憧れるとかそういうのはないなぁ」
「そうなのか？」
「私って魔力がないから魔法ってよくわからないし」

要約すると姉は同じ剣士で強いから素敵で憧れる。
兄は魔道師で強さが理解できないからすごいとは思っても興味がない、ということか。
最後までレティが赤くなることはなかったから本気なのだろう。
レティが赤くならなかったからか、去り際の兄の背中が少し寂しそうだった。

「ふあぁぁー」
「あら、ヴァイスおねむ？」

ヴァイスが大きな欠伸をする。

「ねむー」

ごしごしと目をこすっている様はとても子供らしい。
まだ時間は深夜で竜といえど子供は寝ている時間だろう。夜行性でもないようだし。

「それじゃ結界を張りなおして休もうか」
「そうね」

結界を張りなおして再び俺達は体を休める。
ただ、まだレティの反応で気になることがあった。

ヴァイスが竜だと知ってもあまり驚かなかったこと。
そのまま同行するとなっても態度がまったく変わっていないこと。
いくらヴァイスが子供で人の姿をとっているとはいえ、普通は何かしらあるもんじゃないだろうか。
それとも俺の考えすぎで、世間の女性は竜をかわいいだとか思っているのだろうか。

実際街にでることはあっても、生活の時間のほとんどを山の中で引き篭りのようにすごしてきたのだから世間の常識で知らないことがあってもおかしくはない。
自分の常識についての自信をすこし無くしたところで俺は眠りについた。

11：サンタンドレ到着

サンタンドレにある騎士学校の門の前。
ここがレティを送り届けるという依頼の達成場所となる。

レティはさすが騎士のたまごだけあって体力が高く、ヴァイスも竜だからか大して休憩も必要なかった為予定よりずっと早く到着することができた。

「到着ー！」
「とーちゃくぅー！」

レティとヴァイスがぴょんと道路と学校の敷地の境を飛び越える。
二人がニコニコとじゃれている姿をみるととても和む。
たった二日間の旅だったがここでレティとは別れるのだ。
短かったが内容が濃すぎたせいかずっと一緒に旅をしていたような気すらする。

レティがくるりとこちらを振り返る。

「お疲れ様、ルッツ。依頼完了だね」
「あぁ、色々あったが無事に到着できてよかったよ」
「あはは、黒竜や勇者様に会っただなんて誰も信じてくれないだろうけどね」

何せ結界の中だったのだから被害は最小限だ。
しかも黒竜はすでに地面の下なのだから。

「黒竜が現れたのは俺達が原因だったわけで・・・巻き込んでしま

って悪かったな」
「ううん、貴重な体験ができてよかったって思ってる。ルッツのおかげでティアナさんにも会えたしね」
「はは、そういってもらえると助かるよ」
すっとレティが小さな袋を差し出す。
「はい、報酬」
「あー・・・」
レティから袋を受け取り、中身の半分だけをもらい残りをレティに返す。
「ルッツ？」
「賊はでたけど倒したのはレティだし。全部は受け取れない。そもそも黒竜の件にまで巻き込んで・・・」
本当なら全部返したいところだがさすがに自分の旅費の都合もあるので半分は頂戴する。
情けないが俺もなりたての冒険者で手持ちがないのだ。本当に情けないが。
「でも依頼は依頼なんだから遠慮しないで受け取って？」
上目遣いでお願いされた。
きっとレティに自覚はないのだろうがレティはかなりかわいい。
きれいへの成長途中のかわいらしさとでもいうのだろうか、かわいくもありきれいでもある。
つやつやの黒髪に白すぎない健康的な肌。
ぱっちりとした翡翠色の瞳。

間近で直視するのはいろんな意味で危険で思わず目をそらす。
「ルッツ？とにかくこれは受け取って」
「あー・・・うん」
結局受け取ってしまった。
しかし俺にも一応冒険者（2日目だが）としてのプライドがある。
「じゃあ、また何か依頼をしてくれ。その代金ってことで受け取っておく」
「ふふっわかった。そういうことにしておくね」
「いつでも、どんな依頼でもいいからな？遠慮しないで言ってくれ。次ぎ会えるのがいつかはわかんないけどさ」
「けっこうすぐ会っちゃったりしてね」
「ならすぐに依頼内容を考えてもらわないとな」
くすりと笑ってレティが手を差し出し、俺はその手を握る。
「またね」
「またな」
別れでなく再会を約束する言葉。
「ねーちゃ、ばいばいなの？」
泣きそうな顔で俺を見上げるヴァイス。
思った以上にレティに懐いていたらしい。
「ヴァイス、いつでも遊びに来てね」
「うんー」

ぎゅっと抱き合ってから離れる二人。

「またねーっ！」

学校を背に歩き出す。
これからはヴァイスとの二人旅となる。

「面倒だから、ヴァイスは俺の弟ってことでいいか」
「おとーと？」
「つまり俺がヴァイスの兄になるってことだ」
「ぼくのにーちゃになるの？」
「あぁ。嫌か？」

キョトンとした様子だったヴァイスだが、少しだけ考える素振りをしてぱっと顔を上げる。

「んーん。にーちゃだいすきー！」

ぎゅっと俺に抱きつくヴァイス。
これはかわいい。弟っていいものだな・・・
かわいいヴァイスに癒されていた俺は、ヴァイスのいつもは青い瞳がきらりと赤く光ったことに気付かなかった。

とりあえず次ぎの目的地は王都。
馬車で3日ほどの場所だ。

１２：乗合馬車

王都までば基本的に馬車を利用する。

大きな街であれば転移用の魔方陣があったり、それなりの街なら飛竜に客を乗せ目的地まで送り届ける竜屋という店もある。

サンタンドレにも竜屋はあるのだが、飛竜に乗る代金は高いので一般の人間はまず使わない。

ちなみにミモレットに竜屋はなかった。

竜屋のあるサンタンドレが近いのも竜屋がなかった理由の一つだろう。

そんなことから馬車を使うのが一般的となっている。

馬車の代金は一人銅貨５０枚。決して安いものではない。

しかし今の俺は依頼で受け取った銀貨２枚がある。

ちなみに銀貨１枚で銅貨１００枚分の価値があるので銀貨１枚で二人分の馬車代になる。

多少の手持ちはあるがこの出費はかなり大きいので依頼料を受け取っていて助かった。

「よし、乗合馬車に乗りに行くか」

「あいー」

町外れの馬車乗り場へと向かうと、そこは人で溢れかえっていた。

人ごみを掻き分けてなんとか受付へと到達する。

受付で言われた言葉。なんとなく言われる事は予想していたが。

「すいません、馬車は１週間先まで予約でいっぱいなんですよ」

「はぁ？何でまた・・・」
「あれ、お客さん知らないんですか？来週王都で聖誕祭があるんですよ。みんな一目勇者様に会おうと必死なんです」
聖誕祭・・・7年前に暗黒竜を倒したという勇者の誕生日。
あの二人の誕生日を聖誕祭などとご大層な呼び名で祭りを開いているのだ。
記憶の隅に追いやっていたのですっかり忘れていた。
なるほど、それでミモレットの馬車も王都への経由地点であるこの街への馬車が埋まっていたのか。
王都に行けば盛大に誕生日を祝われているあの悪魔の二人にまた会うことになる。
そもそもあの二人、王都に行くのであれば一緒に魔法で転送してくれればよかったんじゃないだろうか。
壮大な嫌がらせのような気がしてきた・・・

「どうしたもんか・・・」

思わず頭をかかえる。
一週間も待っている時間はない。
一刻も早く王都へ行かなくては母からのどんな報復が待っているかわかったものではないのだから。

「お客さん急ぎなら、竜屋にいってみたらどうだい？高いけどまだ空きがあったみたいだよ」
「竜屋か・・・ありがとう。行くだけ行ってみるよ」
人俺の顔色が相当悪かったのだろうか、人のよさそうなお兄さんは俺を心配してくれたらしい。

しかし竜屋を利用するとなると別の心配がでてくる。
そう、金の問題だ。

「にーちゃ、りゅーやって？」
「飛竜に乗せて目的地まで運んでくれるお店だよ。そうかヴァイスは知らなかったか」
「うんー」

そういえばヴァイスは竜なのだから人間社会のことを知らなくても不思議はない。
今は人の姿だが本来は竜・・・竜？

「ヴァイス、もしかして空を飛べたりするのか？」
「じょーずじゃないけどとべるー」

もしやと思って尋ねてみたが当たりだったようだ。
すぐに村のはずれのすこし開けた場所に移動する。

「王都まで飛んでくれるか？」
「うん。うにゅ～」

かわいらしい掛け声のようなものを発すると、ぽうとヴァイスの体が淡い光に包まれる。

「にゅ～」

そこには中型犬ぐらいの小さな白い竜の姿があった。

「・・・そういえばそんなサイズだったな、ゴメン」
「にゅ？」

俺が乗ったらあまりにもかわいそうなサイズだ。
竜だから俺を乗せても大丈夫なのかもしれないが、如何せん良心が痛む。
俺は早々にヴァイスに乗せてもらう事を諦め竜屋に向かった。

１２：乗合馬車（後書き）

ブログを開設してみました。
たいした内容ではないですが興味を持たれた方は遊びにきてやってくださいませ。

１３：主を亡くした飛竜

ヴァイスに乗せてもらうことを諦めた俺達は竜屋へとやってきた。
基本的に竜屋を利用するのは貴族などの裕福な階級の人間や高レベルの冒険者が多い。
俺のような駆け出し冒険者が利用できるようなものではないのだ。
竜屋の受付は恰幅のよいおばちゃんだった。

「王都まで行きたいんだが」
「王都までかい？ちょいと距離があるから一人金貨１枚になるけど大丈夫かい？」
「はぁ・・・合計で金貨２枚か。ギリギリ足りないなぁ」

手持ちは合計で金貨１枚と銀貨６枚分。銀貨１０枚で金貨１枚分になる。
やはり竜屋は高かった。
金貨１枚あれば三ヶ月は楽に生活できる。

「お兄さんは貴族ってようでもないし王都に大事な用事でもあるのかい？」
「かなりね・・・どうにか安く乗る方法なんてないかな？」
「ないー？」
「そうだねぇ・・・」

ダメもとで聞いてみる。
ヴァイスも瞳を潤ませながらおばちゃんを見つめる。
がんばれヴァイス。お前ならおばちゃんを落とせるかもしれない。

「ウチには1匹乗り手のいない飛竜がいるんだが・・・」
「乗り手がいない？」
竜屋の飛竜にはそれぞれ専属の乗り手、いわゆる竜使いが存在する。
飛竜は主と認めたものにのみ従う。
竜使いの数は多くなく、竜屋によっては飛竜と竜使いが一組しかいないなんてザラにある。
便利だが貴重な存在。需要はあれど供給が足りない。
竜屋の利用料金が高いのも仕方がないといえる。

「なんでまた乗り手がいないんだ？」
「一年前・・・飛行中に蒼竜に襲われたんだよ」

ふうっと息をつくおばちゃんの顔はとても悲しそうだった。
蒼竜、それはブルードラゴンとも呼ばれる竜でとても好戦的な種だ。
冒険者の中でも黒竜ほどではないが脅威として恐れられている。

「運が悪かったとしか言いようがないね。飛竜は大きな怪我を負っていたけどなんとか助かったんだがねぇ・・・息子はダメだったんだ」
「息子さんの飛竜・・・」
「手放すに手放せなくてねぇ。でも主のいない息子の飛竜はどんどん他の飛竜達から孤立しまった。可哀相だけどどうすることもできなくて困ってたんだよ」
「にーちゃ、ぼくその子にあいたい」
俺の服の裾をひっぱるヴァイスの顔は真剣だった。
同じ竜としてその飛竜が気になるのだろう。

「無理だとは思うけど、あんたたちがあの子に認められたなら・・・」

そう言うとおばちゃんは俺達を店裏の竜舎へと案内してくれた。

竜舎の一番奥。
他の飛竜はちょうど出払っているらしくひっそりとしているその場所にいた飛竜。
まだ若いその飛竜は体を丸め床に伏せていた。

「コイツが息子の飛竜で名前はライゼ。辛うじてエサは食べてくれるんだけどね・・・古傷もあるのに治療させてくれないし、あたし以外に触れられるのを嫌がるんだ」

おばちゃんが背を撫でてもライゼはこちらを振り向こうとはしない。
ヴァイスがおばちゃんの横からすっと手を伸ばす。
ヴァイスの手が体に触れた瞬間、ライゼの体がぴくりと震えた。

「グルルッ・・・」

明らかに威嚇する声を上げるライゼ。
ヴァイスはそれに構うことなくライゼの正面に回る。

「坊や、あぶないよ！この子はあたし以外は・・・」
「だいじょうぶ」

いつもよりはっきりとした口調。
纏う雰囲気も変化が現れていた。

「グ・・・ルッ・・・・」

さらに威嚇しようとしたのだろうか、大きく口を開きかけたライゼの動きが止まる。
そのまましばらく見詰め合う一人と一匹。
ヴァイスはまっすぐにライゼを見つめたまま眼をそらす事はない。
先に動いたのライゼだった。

「キュー・・・」
「まさか・・・！ライゼがあんな小さな子供に懐くなんて・・・！」

ヴァイスに頭を垂れるライゼを見て驚愕の表情をうかべるおばちゃん。
実際竜が主と認めるのは力がすべてではない。
飛竜にも個人差があってそれぞれ認めるべきところが違う。
内面性を重視するものや力のみを重視するものもいる。

しかし、だ。

ライゼはおそらく懐いたわけではないだろう。
単に自分より上位の存在が目の前に現れたから従おうとしただけだと思われる。
白竜は竜の中でも最上級といっていいほど上位の存在だから。
まだ子供とはいえヴァイスは白竜。
おそらく封印で変えていた気配をヴァイスが意図的に白竜だと示したのだろう。
そしてライゼはヴァイスの正体に気付き、強いものに巻かれたというところか。

少しだけライゼに親近感が沸いた。

きっとこいつもヘタレなんだろうな・・・

１４：白竜の力

すっかりヴァイスに懐いた飛竜のライゼ。

「キュー」

「うん・・・にーちゃ、この子が王都までつれてってくれるってー」

「・・・驚いた。言葉がわかるのかい？」

「うん！」

おばちゃんはしばらく考え込み、恐る恐るという感じで口を開いた。

「この子がこれからどうしたいのかを聞けるかい？」

「うんー。・・・どうしたい？」

おばちゃんは胸の前で手を組んでヴァイス達の様子をじっと伺う。

しばらくしてヴァイスが振り返る。

「えっと・・・一緒に行きたいけどおばちゃんをひとりにしてはいけないって。ておどろさんをまもれなかったからせめておばちゃんだけでもまもるんだって」

「テオドロ・・・！その名前を知ってるって事は本当に竜の言葉がわかるんだね」

「おばちゃん・・・？」

おばちゃんの目からはぽたぽたと涙が流れ出ていた。

その涙をぐっと拭うとおばちゃんはにかっと笑顔になる。

「よし、ライゼはあんた達に預けるよ！ライゼに空を飛ばせてあげておくれ！」

「アイツのしたい事ってのはどうするんだ？」

ライゼはおばちゃんを守りたいと言ったはずだ。
飛竜を譲ってもらえるのはかなり助かるが、やりたい事があると言っているので強制する気にもなれない。

「何言ってんだい。これでもあたしは昔冒険者だったんだ。ライゼに守られるほどまだ腕は鈍っちゃいないよ！まだちゃんと武器だって磨いてあるんだ」

そういっておばちゃんは近くにおいてあった両刃の斧をひょいと持ち上げた。
・・・薪割り用にしてはごつ・・・もとい大きいと思ったが、おばちゃんの冒険者時代の愛用の武器だったのか。
周りに割られた薪が散らばっているから実際に薪割り用の斧として活用していたのだろうが。
さすがおばちゃん、無駄がない。

「守るなんて台詞はあたしを倒せる程度に強くなってからいうんだね！」
「キュ・・・」

おばちゃんがライゼに向き直り胸を張って高らかに宣言した。
ライゼが怯んでいる様子から、本気でおばちゃんは飛竜（というよりはライゼ）より強いようである。

「あぁでも、一応お代は頂かないとね。代金は金貨1枚でどうだい？」

商売人らしく代金を請求され金貨を1枚おばちゃんへと渡す。

おばちゃんはぐっと金貨を握り締め豪快に笑った。

「まぁ近くにくることがあったら顔をだしておくれよ。その子は息子のようなもんだからね」

「それぐらい喜んで」

「うんうんー」

ライゼを連れて外へ出ると、かなり久しぶりに外に出たのであろうライゼはぐっと翼を広げて伸びをした。

その翼の付け根、つまり肩あたりに大きな古い傷がある。

治療させてくれなかったという傷のことだろう。

「いたくない？」

「キューー」

やはり傷に気付いたヴァイスがライゼに尋ねる。

「やっぱりいたいんだね？ぼくがなおしてあげるー」

「・・・治す？ヴァイス、呪文が使えるのか？」

「ううん、でもこうするとなおるんだよー」

ふるふると首をふって、おもむろに自分の指をかりっと噛む。

じんわりと血の滲む指をライゼに差し出して言う。

「これなめればなおるんだよー」

「それってまさか・・・」

ぺろりとライゼがヴァイスの血を舐めると、ライゼの肩の傷がほんのりと光を帯びる。

・・・間違いない。万能薬ともいわれるエリキシル。
精製したものを服用すれば不老不死になれるとまで言われる伝説の霊薬。

あっという間にライゼの傷は消え去っていた。

15：引きこもりの代償

厄介ごとの種は尽きない。

おばちゃんの提案で傷が消えたライゼの背に乗りテスト飛行をすることとなった。

結果は・・・

「わわっ！」

「浮遊術（シュヴィメン・フェーダー）！」

飛び上がりぐんぐん高度を上げていたライゼ。

しかし急に失速し急降下しだしたのだ。

辛うじて浮遊呪文を発動させゆっくり降下し事なきを得たのだが。

「あーやっぱりねぇ・・・」

「やっぱりって・・・？」

「ほらその子って半年も引き篭ってまともに運動してなかったんだよねぇ」

運動不足すぎて俺とヴァイスの二人を乗せて飛ぶことはきつかったらしい。

ちなみに普通の竜屋の飛竜は竜使いを含め大人5人程度乗る事ができる。

「へたれすぎるだろ・・・」

「まぁ二・三日運動させればあんた達二人ぐらいを王都に運べる程

度にはなるよ」
「はぁ・・・」
「はは、それまではうちに泊めてあげるからゆっくりしていくといいよ」

そう行っておばちゃんは仕事の為店に戻っていった。
二・三日、その時間が惜しい。
・・・こうなれば最終手段を取るしかないか。
あれこれと思考を巡らせていたが、ヴァイスの楽しそうな声で遮られる。

「ねえねえルッツ、すごいんだよ！」
「どうしたんだ？ヴァイス」
「みてみて！じゃーん！」

両手を広げて俺の視線を促すその先にいたのは、青い髪の俺と同年代ぐらいの男。
その男もヴァイスと同じようににこにこと嬉しそうな表情をしていた。

「誰」

思わず呟いてから男の人とは違う気配に気付く。

「お前・・・ライゼ？」

恐る恐る尋ねると男は大きくうなずいて肯定の意を示す。

「なんでまた人の姿に・・・」
「ヴァイスの血を舐めて傷が治ったときに一緒に魔力も得た。まぁ

人化の術しか使えないが」
「ね、すごいでしょ？」
「すごすぎるだろ・・・」
「鍛錬すれば他の魔法も使えると思うぞ」

ふふん、とライゼが胸を張る。
本来竜族のなかでも魔力の低い部類の飛竜が人化するほどの魔力を得るって、例えそれが人化しかできないとしてもどれだけすごいことだかわかってるんだろうか。
人化ができる竜は伝説級のはずなのに、その伝説級の竜が目の前に二匹もいるなんて。

とにかく厄介な血であることは間違いない。

その力を知られればそれを欲する人間は際限なく現れるだろう。
人間や黒竜どころか、人間以外の種族もヴァイスの血を求め狙ってきたって不思議はない。
襲われる要素満載すぎる血だ。
しかし、だ。

「ライゼの場合魔法の鍛錬より先に基礎体力を付けるべきだろう」
「何だよ、これでも人間のお前よりはあるはずだぞ」
「ほっほぅ？」
「にーちゃ、らいぜけんかはだめー！」

ヴァイスが泣きそうな顔で俺とライゼの間に割って入った。
別に喧嘩をするつもりは毛頭なかったので、ヴァイスに出来るだけにこやかな笑顔で返す。

「ライゼは運動不足だっただろ？だからライゼの運動も兼ねてに王

都に着くまでに必要な食料を買出しに行こうと思うんだ」
「うんどう？」
「・・・どういうことだ？」
ここから市場までは徒歩十分程度。走れば三分もあれば着くだろう。
まずは軽く走ってみようと伝えた。

「なんだそんな短い距離なんて運動にならないだろ」
ライゼがバカにしたように言う。
コイツ・・・竜の姿の時は気にならなかったがかなりいい性格をしている。
そして何故か微妙な敵意すら感じる。

「とりあえず店が閉まる前にいくぞ」
「わかったー」
「フン・・・」

軽いランニング程度にもならないが、買い物の荷物を持たせたりして少しでも体を動かさせるべきだろう。
実際人の姿のほうが体力はわかりやすい。
飛竜は本来体力のある種なのでいくら引き籠りで体力が落ちているといってもさすがに俺よりはずっと早く到着するはずだ。

「すたーとぉ！」

ヴァイスの声を合図に走り出す。
さすがに飛竜だけあってかライゼが一番前に躍り出た。
全力疾走する必要はないのだが本人がやる気のようなのであえて口にはしない。

しばらくたっても全力疾走したはずのライゼの背中が見えなくなる事はなかった。
むしろ段々とその差は縮まっていく。
そして一分も経たないうちに俺とヴァイスはライゼを抜き去っていた。

目的地の市場に到着した頃にはぜぇぜぇと肩で息をしているライゼ。
俺は想像以上にライゼの体力に驚かされた。もちろん悪い意味で。

体力がないにも程がある。

１６：ライゼの体力補完計画

結論。
ライゼの体力は二・三日どうこうしたかといって王都まで辿り着けるレベルじゃない。

買い物の荷物も全部持つことは出来るのだが、すぐに疲れて休憩するという有様。
六ヶ月の引きこもりですっかりもやしっ子になっていた。
悠長にライゼの体力がつくのをまっている時間はない。
そこで俺はさっきちらっと考えていた最終手段を使う事にした。

「明日王都に向けて出発するぞ」
「え、らいぜだいじょーぶなの？」
「大丈夫、俺がなんとかするから」
「・・・・・フン」

さすがにあれだけの失態を演じたライゼは大人しくしていた。

「とりあえずおばちゃんや他の人間にはライゼが人の姿になれることは秘密な？」
「なんでー？」
「ヴァイスの力のことが知られるとヴァイスに危険が及ぶからだよ」
「よくわかんない・・・」
「ライゼもわかったな？」

横でふてくされていたライゼにも声をかける。

「もちろんだ。ヴァイスの不利益になるようなことはしない」
「・・・そうか」

真面目な顔でそう返された。
明らかに俺に対する態度と違う。
そこまでヴァイスに懐いているということだろう。

「出発は明日の朝でいいな」
「はーい」
「・・・あぁ」

竜の姿に戻ったライゼを残して店に戻る。
おばちゃんに明日発つ事を伝えると、本気で心配された。
確かに飛び上がっただけで体力が尽きて落ちる飛竜なので心配されるのは当然だろう。
とりあえずおばちゃんには裏技を使って行くので大丈夫だと諭してなんとか納得してもらった。

そして出発の朝。

「本当に出発するのかい？大丈夫かねぇ・・・」
「えぇ、大丈夫ですよ。使えそうな魔法がありますから」

魔法を詳しく知らないおばちゃんはコレで納得したのだ。
実際体力の底上げができたりするような魔法は今のところ発見されていない。
だが体力を回復させるという魔法なら存在する。

「常に体力を回復し続けてライゼを飛ばせ続けます」
「そんな便利な魔法があるのかい？」
確かにそこだけ聞けば便利な魔法だろう。
しかし世の中そんなに甘くはない。
「王都までそれを繰り返せば、反動で二・三日動けなくなりますけどね。体力もそれなりに付きますから一石二鳥です」
「スパルタだねぇ」
「愛の鞭です」
「らいぜがんばれー」
ヴァイスによしよしと撫でられながらも、ライゼは首を左右に振って本気で嫌がっていた。
当然ライゼが嫌がろうがそんなものは無視する。
おばちゃんに見送られライゼは俺達を背に乗せ大空へと飛び立つ。
が、やはりすぐに体力が尽きたようで緩やかに下降し始めた。
「おー、昨日よりはマシだな。治癒（ハイルング）！」
上位の回復魔法を惜しげもなく連発する。
これより下位の回復魔法は怪我などは治療できても体力は回復できないのでしかたがない。
そして唱えてみてわかった事。
ライゼの体力の限界が低すぎて大して魔力を食われなかった。
俺の魔力を樽に入った水に例えるならライゼの体力回復に必要な魔

力量は数滴の水という程度。
それだけライゼの体力がないということなのだが。

「この程度なら余裕だな。ほれ、治癒（ハイルング）！」
「グル・・・」

恨めしそうにライゼがこちらを振り返る。

「ヴァイス、がんばってるライゼを応援してあげような」
「うん、らいぜがんばってー！」
「キュー・・・」

ライゼ、扱いやすいヤツめ。
ほぼ回復魔法をかけ続けられているという情けない状態だが、普通の飛竜と同程度の時間で到着できそうだ。

「休憩も必要なさそうだなー、治癒（ハイルング）！」
「らいぜすごーい！」

ヴァイスの声援もあってライゼは謀反を起こす事もなく順調に飛び続ける。
これならば母親の報復も回避できそうだ。
それでもあの親に会うのかと思うと、王都が近づくに連れてため息が増えていく。

日か沈みかけた頃、とうとう王都が見えてきた。

17：王宮からの使者

ライゼが力尽きて墜落することもなく無事に王都へとたどり着いた。
王都の中では安全面から飛竜が降りられる場所は決められてる。
そして街中は連れて歩けないので個人の飛竜の場合そこで竜舎に預けなくてはならない。
しかし竜舎に飛竜を預けると人の宿代の倍以上かかってしまう。

「よしライゼ。そこの街はずれの場所に降りてくれ」
「キュー」

やっと降りられるからか、ライゼは俺の言葉に素直に従う。
無事に着地したライゼはかなりへばっていた。

「ほら、治癒（ハイルング）！」
「グル・・・」

もうこの呪文を唱えるのも何度目になるのか。
上昇して力尽きてゆっくり下降するたび呪文を唱えて再上昇。
それを繰り返してやっとここまで到着したのだ。
少しずつだが下降する速度が緩やかになっていたので多少だが体力も付いてきているだろう。
明日以降の反動はすさまじいだろうが。

ライゼの背から降りた俺はすぐに手早く結界を張る。

「なにしてるのー？」

「よし、ライゼ人の姿になってくれ。結界を張ったから人に見られる心配もない」
「・・・キュ」

ライゼの体が青い光に包まれて形を変えていく。
そして再びライゼは人の姿になった。
ちなみにライゼの人の時の姿は一見爽やかそうな青年だ。
これでへたれでなかったらかなりモテるんじゃないだろうか。

「人化してどうするんだ？」
「竜舎は高いから節約だ。それにお前も一緒の宿のほうがいいだろう？」
「らいぜもいっしょ？やったぁ！」
「・・・そうだな」

喜ぶヴァイスを見るライゼの頬が緩む。
本当にライゼはヴァイスが絡むと素直だ。
これが主と認めた存在の力なのか。
少し違うような気もするが扱いやすいのでヨシとしよう。

俺達が王都の中へと入った頃にはすでに日は暮れかけていた。
母親が勤めているのは王宮なのでさすがにこの時間から行く事はできない。

実際母親の仕事が特殊な事と俺がその子供であることから中に入る事は可能なのだが、王宮だけあって手続きは面倒だし時間がかかる。
さらにライゼにかけた呪文の消費魔力が低かったとはいえ、かけた回数が尋常じゃなかったのでそれなりに疲れている。
そんな疲れている状態で、会えばさらに疲れることが目に見えてい

る母親に会いたくないというのが正直なところだ。
俺たちは手近な宿を取って王宮へは明日の朝出向くことにした。

「ルッツ＝ツェルニー様ですね」

宿の受付のお姉さんに話しかけたとたん断定系で名前を呼ばれた。
もちろんこちらからは名乗っていない。
考えられる理由は一つ。

「まさか・・・」
「王宮から使者の方がおみえになってますよ」

お姉さんが示す先にいたのは、帽子を目深に被っていて表情は良くわからないが俺と同じくらいの年代であろう男。
どうやら先手を打たれていたらしい。

「はぁ・・・」
「・・・ここへ来る事がわかっていたのか？」

ライゼが不思議そうに首をかしげる。
そこへ物腰優雅に使者の男が歩み出た。

「本日こちらに来られる事がわかっていたので迎えに行くようにと。私と一緒に王宮までご足労願います」
「おむかえ？」
「はい。宿の裏に馬車をご用意しております」

この宿の前はそれなりに広い道で馬車と泊めておく余裕は十分にある。

今日俺たちがここに来て宿を取る事がわかっていたので迎えにきたが、王家の紋章付きの馬車なので気付かれて逃げられないように宿の裏に馬車を隠しておきましたよ、と男の雰囲気が語っている。
すでに退路は絶たれていた。

「どうするんだ？」
「・・・いくしかないだろ」
「そうしてくださると助かります。ではこちらに」

男の後をついて宿を後にする。
・・・さよなら俺の一晩の安息。

宿の裏の馬車はやはり王家の紋章が付いていた。
男に促されて俺達は馬車に乗り込む。

「では出発致します」

男が御者に合図し馬車が走り出す。
辺りはすっかり日が落ちて街灯が灯っていた。

俺は視界を流れていく街灯を眺めながら今日何度目かのため息をついた。

１８：使者の正体

馬車は王家のものだけあって、揺れもほとんどなくクッションもふかふかで快適だった。
ヴァイスは幸せそうな寝顔で夢の世界へと旅立っている。

「もう少しだけご辛抱くださいね」

使者の男がヴァイスをささえるライゼに声をかける。
ライゼは無言で頷いた。

聖誕祭を控えた王都には人で溢れかえっていて馬車もあまり速度をだせないでいたが、王城に近づくにつれてだんだん人の姿も少なくなっていき、馬車も本来の速度を取り戻しつつあった。

王城の敷地に入る少し手前にある堀に差し掛かった時、強い魔力を感じて窓の外を見れば、迫り来るのは大きな火球。

「あれは新手の歓迎ってやつか？実は新型の花火とかでさ」

使者の男に尋ねる。

「そんなものは聞いていません。明らかに攻撃じゃないですか？」

こんな状況だが男に焦りの様子は見られず、ゆっくりと優雅に立ち上がった。
俺も呪文を唱えつつ立ち上がる。

「装甲障壁（パンツァー・シルト）！」

火球と馬車との間に魔力の盾を展開する。
目前に迫っていた火球は盾に阻まれて霧散した。

「さすがですね」

使者の男はそう言うとひょいと窓から馬車の外に飛び出した。
慌ててその後を追い外へと出る。

「おいっ・・・！」
「ライゼはそこにいろ！ヴァイスから離れるなよ！」

置いていかれたライゼが叫ぶが、未だにぐっすりと眠っているヴァイスをそのままにするわけにもいかず馬車に留まらせる。
それにあの男の正体が俺の予想通りだとすると、この場に残るほうが安全だろう。

男は馬車の屋根の上に立っていた。
俺も男を追って馬車の屋根へ立つ。

「やれやれ、面倒だね」
「その言葉そっくりそのままお前に返すよ」

くるりと振り返った男の口元はにやりと不敵に微笑んでいた。
辺りには複数の襲撃者達の気配がある。
面倒だがヴァイスとライゼを守らなくてはならないので相手をするしかないだろう。

「しょうがない。付き合ってやるよ」
「それは光栄」
その瞬間男の背後に多数の影が現れ飛び掛ってくる。
それに合わせて俺は唱えていた呪文を解放させた。
「空弾舞（クーゲル・ロンド）！」
魔力によって生み出された複数の空気の塊。
威力は弱いがある程度それぞれにコントロールが効くので使い勝手はよい呪文だ。
塊を操って使者の後ろに現れた襲撃者を叩き落す。
しかし強いパンチ程度の威力なので牽制にしかなっていないだろう。
「はは、見事だな」
心底楽しそうに男が笑う。
しかし今叩き落した襲撃者達の狙いの先にいたのは、今目の前で笑っている使者の男。
予想が確信へと変わる。
ヤツのわざとらしい言動に思わず漏れるため息。
「あいつらの狙いはお前だろ、フェル。あとは自分でなんとかしろ」
「何だ。バレてたのか」
「それにその御者、ターヴィだろ」
ちらりと眼下の御者に視線を向けると、御者の男は心底驚いたようにぽかんとこちらを見ていた。
しかしすぐに落ち着きを取り戻しがっくりと肩を下げた。

「はぁ、俺もバレてましたか。しかたないですね」
「御者がそんなゴツイ剣を持ってるはずないだろ」

御者を勤めていたターヴィが馬車を停止させ、脇に置いてあった剣を手に取る。
護身用にしては大きすぎる剣で御者が持つには違和感がありすぎる。

「そりゃそうですね、騎士の剣ですし」
「ちっ、つまらないな」

フェルが舌打ちをして被っていた帽子を投げ捨てる。
帽子の下から現れたのはやはり見知った男の顔。

「それではいきますよ」

御者の格好で騎士の剣を構えるという妙な姿のターヴィがフェルに声をかける。
面倒そうにフェルが顔を上げた。

「これってお前の仕事だと思うんだけどなぁ」
「自分で撒いた種は自分で回収するべきです」
「はいはい」

一見頼りなさげな騎士のターヴィと一見優男風のフェル。
そんな二人が襲い掛かる敵達を次々と、それはもうあっさりと倒していく。
ターヴィは剣、フェルはその拳で。

ターヴィは騎士のなかでも重要な任務をもつ近衛騎士。

その任務とはフェルディナンド第二王子の護衛。
フェルは本名はフェルディナンド＝シルヴェストロ＝イェーガー。
この国の第二王子その人だ。

今回俺達を襲ってきたのはフェルを狙う者達であって、俺達はただ巻き込まれただけ。
危ないようなら手助けするのだが、今回の襲撃者たちの実力ではフェルたちには明らかに役不足だった。

19：王都の夜

ほぼ片が付いたと言う時、馬車の扉が開いた。

「ヴァイス、外は危ないから出ちゃだめ・・・」

「ふあぁぁー」

ヴァイスが目を擦りながら外へと出てきたのだ。

ライゼは・・・ヴァイスを止めようとはしたが、体力の限界を迎えていたらしく馬車の床に倒れていた。

その瞬間を襲撃者は見逃さずヴァイスに飛びかかる。

「ちっ！」

フェルが急いでヴァイスの元に駆け寄るが間に合いそうにない。

俺は急いで呪文を唱える。

「装甲（パンツァー）・・・」

「ふぇっくしゅん！」

寝起きで夜風が冷たかったのか、ヴァイスがくしゃみをした。

その瞬間、ヴァイスの口から吐き出された輝くブレスが襲撃者を包み込む。

べちっと音をたてて襲撃者はその場に崩れ落ちた。

静寂がその場を支配する。

「・・・なんだアレは」

「あー・・・企業秘密？」

フェルの問いにそう答えるしかなかった。
馬車の中では倒れたままのライゼが呆然とヴァイスを見つめている。
ヴァイスも竜なのだから何かしらのブレスが吐けてもおかしくはないのだが、人の姿でもブレスを吐けるのは知らなかった。
しかも輝くブレスというのは見た事も聞いた事すらない。

ブレスの効果を確認する為、倒れた襲撃者を突付いてみるとどうやら麻痺しているようだった。
神経毒というやつだろうか。
ヴァイスのくしゃみには気をつけたほうがよさそうだ。

「さてと、それじゃさっさと中に入りましょう。話は中でのほうがよいでしょう？」
「そのほうがよさそうだな」

ヴァイスのブレスで麻痺した襲撃者を縛り上げたターヴィがにこやかに言い、フェルが視線をライゼに向けたまま答えた。

王宮から使者が出ていたのは事実だったようで、すでに部屋も用意されているということだった。
襲撃に合った事もあって当日の母親との面会は免れる事ができた。
襲撃者グッジョブ。

すぐにきちんと身なりを整えたフェルとターヴィに案内され客室へと通される。
王子が案内は普通しないがフェルのことなのでまたターヴィに無理

やり同行したのだろう。

寝ぼけたままうとうとしていたヴァイスをベッドに寝かせると、すぐに規則正しい寝息が聞こえてきた。

体力の限界だったライゼもごろりとベットに横になった。

「さて、どうして使者なんて真似してたんだ？フェルディナンド第二王子様」

「あーそのことねぇ・・・」

ふふ、とやわらかく微笑むフェル。

服を着替えたフェルはすっかり王子様らしくなっていた。

「王子様って本当だったのか？」

声の主はもそもそと布団から首だけ出してこちらを見ているライゼ。

・・・何というか、でかい芋虫みたいだ。

「正真正銘王子だよ」

「ふむ。確かにルッツと違って爽やかな笑顔だな」

フェルの笑顔をみて納得するライゼ。

「何言ってんだ。こういう胡散臭い笑顔のヤツは必ず裏があるんだぞ」

そう、フェルの笑顔は兄であるエリクの笑顔とそっくりなのだ。

間違いなくコイツも黒い、兄属性の人間だ。

「どうせ別の人間が使者だったんだろうが、力ずくでその仕事を奪

って自分が使者になったとかそんなとこだろ」
「さすがルッツさん。王子をよくわかってらっしゃる」
ターヴィにパチパチと手を叩いて褒められた。
もうちょっとまともな理由かと思ったがその通りだったらしい。

「フェル様ったら使者の人間に拳をちらつかせながら使者の役やりたいなーって言うんですよ」
「違うぞ。俺はヒマだから一緒に鍛錬しないか？って聞いただけだ。そうしたら使者の役を俺に譲ってくれたんだよ」

フェルの戦闘スタイルは拳に魔力を乗せて戦う武術タイプで、その魔力を乗せた拳は普通の剣などあっさり叩き折る威力を誇る。
しかも無意識に魔力の鎧に守られているような状態でその辺の騎士よりずっと強い。
魔法を扱えない人間ならば魔法剣でも持っていない限りそうそうフェルに傷をつけることはできない。
魔力を乗せて攻撃できる事やその異常な身体能力は秘密にしいるらしいが、武術の使い手である事は誰もが知っていることだ。

「立派な脅しだな」
「ですよねー。大人しく待っていてもどうせ明日にはルッツさんに会えるのに」
「・・・フェル、お前そういう趣味だったのか」
「ちがっ・・・！俺は別にっ・・・」
「ふーん。お前達は仲がいいんだな」

大人しく会話を聞いていたライゼが納得したようにうんうんと頷いていた。

「「それはナイ」」

慌てて否定すればしっかりとフェルと被ってしまった。

「ね、本当に仲良しさんなんですよ」

「そのようだな」

嬉しそうにライゼに話すターヴィ。

なんだかちょっとバカにされた気がするのは気のせいだろうか。

２０：聖誕祭の思い出　１

「それにしてもルッツさんは何故この時期に王都へ？今まで聖誕祭の時は絶対に来なかったじゃないですか」
「いや、初回だけは参加してたはずだぞ。確かエリクのファンに殺されかけたんだったよな」
「あれは・・・思い出したくもないな」
フェルの言うとおり、七年前まだ幼かった俺は初回の聖誕祭に参加した。

聖誕祭の正式名称は『勇者様生誕記念祭』というとても痛々しいものだったが、当時の俺は勇者と呼ばれる兄と姉をとても誇らしく思っていた。
その為王様に聖誕祭に招待された時は喜んで王都へ来たのだった。

祭りのメインは勇者である二人のパレード。
集まった民衆に手を振るというもので、俺も何故か馬車の後ろに乗せられて一緒にパレードに参加させられた。
勇者と王宮関係者のなかにぽつんといた子供はかなり違和感があったのだろう。
あの子供は何者だ、と人々の間で話題になったらしい。
別に隠しているわけでもなかったので弟だという事はあっという間に広まった。

「勇者様方の弟？それにしては似ていない・・・」
「なんかパッとしない弟さんね」

「あの髪、まるで白髪のようだね」

そんな中傷じみた言葉なども、言っている本人は小声で言っているつもりだろうがしっかりと耳に届いていた。
けれどそんなことは気にならなかった。
昔から兄と姉は優秀すぎるほど優秀で、いつも陰で比べられているのを知っていたから。

違った事は二人に熱狂的なファンというものがいたということ。
そしてその存在をその時初めて知った。

姉のファンは大半が男性で直情型が多かったので俺に被害はほとんどなかった。
兄のファンはほぼ女性のみで、いかにして自分をアピールするのかと躍起になっている者が多かった。

勇者と呼ばれる兄に一般市民が直接会う事は難しい。
そこで比較的簡単に会う事の出来る俺を利用しようとしたんだろう。
城下に買い物に出てすぐに、大勢の女性に囲まれた。

肉食獣に狙われる草食獣の気分とでもいうのだろうか。
口元は笑っていても目が笑っていないおねーさま方に囲まれて生きた心地がしなかった。
腕を掴まれ、服を引っ張られる。

「ルッツ君よね？王都案内をしてあげるわ！」
「あら案内なら私が！」
「いえ私が！」
以下略。

そのうち誰かが誰かの髪を引っ張っただとか、どんどんヒートアップしていくおねーさま方。
取っ組み合いの喧嘩に発展したその時。

づどんっ！

ヒートアップしすぎた誰かが放った呪文が炸裂した。
突如出現した結界の中で、だが。

「うーん、さすがにこの状況でコレは危ないですよ？」

声の主に気付いたおねーさま方から黄色い悲鳴があがる。
そこにいたのは杖を片手に軽く構えた兄。

「エリク兄さん・・・」
「ティアナがルッツが迷子になっているんじゃないか心配だから見に行けってね。迷子にはなっていなかったようだけど・・・来てよかったよ」
「あの、エリク様・・・私達・・・・・」

おねーさま方の間に今の失態を見られてしまったという動揺が走る。
そんなおねーさま方にくるりと振り返り、にっこりと微笑む兄。

「皆さんはなかなか王都に馴染めない弟を歓迎しようとしてくれていたのですよね？ありがとうございます。弟の案内は私とティアナでしますから、どうぞ心配なさらないでください」
「はい・・・」

柔らかいが有無を言わせぬ口調。
穏やかだが冷たい印象の笑顔。

俺以外に兄の笑顔にそんな印象を持つものはいなかったようだったが。

「兄さん・・・？」

「また人が集まってきたね。とりあえず戻ろうか」

見回せば先ほど俺が囲まれていた時より遠巻きに人だかりができていた。

「それでは皆さん、失礼します」

兄が再び微笑んで、手にした杖で地面とトンと突く。

転送用の魔方陣が展開されてあっというまに俺達は王宮の中庭へと移動した。

「はぁ、まさか結界魔法すら扱えなかったとは・・・」

盛大なため息をつきながら兄が再び杖でトンと地面を突く。

そこから一気に結界が展開される。

「兄さん？」

「ルッツは魔力の流れが見えるんだから魔法を扱う素質は十分にあるはず。鍛錬しようか」

「へ・・・？」

その時の兄の笑顔は本物だったのだろう。

いつも以上に無駄に輝いていた。

21：聖誕祭の思い出　2

「・・・これが一番簡単な結界呪文。覚えた？」

歌う様に呪文を唱え結界を発動させた兄。

こくりと俺がうなずいたのを確認するとぱっと結界を解く。

「呪文の発動に不可欠なのは魔力容量（キャパシティー）・呪文への理解の二つ。相性がよかったり熟練すれば発動に呪文の詠唱を省略して発動できる。こんなふうにね」

今度は呪文を詠唱せずトンと杖で地面と突く。

すると先ほどと同じように結界が展開された。

「ただし詠唱を省くと基本的には呪文の威力が下がる。呪文によっては効果すら変わる事もあるから気をつけるんだよ」

「う・・・ん・・・・・・」

「まぁそれは魔法が使えるようになれば自然とわかるよ。それじゃ、実践といこうか」

「実践・・・って？」

「まずはさっき俺が唱えた呪文をそのまま詠唱して。理解のない状態では発動しないものだけど、とりあえずね」

さっき兄の唱えた呪文。

一度聞いただけだったが何故か頭にすんなりと入ってきたのでしっかり覚えている。

どうやら結界呪文には発動のキーとなる、いわゆる呪文名を言う必要はないらしい。

深呼吸して目を閉じて呪文と唱える。

「・・・・・」

呪文を唱え終わったが兄の反応がない。
まさか間違えた・・・？
どきどきしながらゆっくりと目を開けると、目の前には驚いた表情を浮かべて立ち尽くす兄。
慌てて周りを見渡すと小さいながらも結界が張られていた。

「驚いた。一度聞いただけで発動までさせるとは思わなかったよ」
「これでよかったの？」
「あぁ、すごいよルッツ」

にっこりと笑う兄にくしゃくしゃと頭を撫でられる。

純粋に、兄に褒められた事が嬉しかった。
ずっと兄と姉は特別で、自分は足元にも及ばないという劣等感があった。
何をしても自分は人並み。
外見だって普通で、人と違うのは決して自慢にはならない髪の色程度。
勇者という特別な存在の兄に少しでも認められた気がした。

「よし。次は・・・」

兄が再びトンと杖で地面と突く。
詠唱もなく張られた結界はあっさりと俺の張った結界を打ち壊して生成される。
強度も比べ物にならないほど強固なもので、今更ながら兄との力の差を見せ付けられた気がした。

「これなら多少の攻撃魔法でも被害も出ないし、周りに気付かれる事もないからね」

そういって杖を地面に置く。

「精霊魔法も試してみようか」

精霊魔法とは火・水・風・地の四属性から成る魔法で、攻撃・補助など色々な効果の呪文がある。
確か兄が得意としているのは火系統で、火系統は攻撃色が強いのが特徴だ。

「それじゃ軽くいくよ」

そう言ってこちらを向いたまま詠唱を始めた兄。
すごく嫌な予感がするのはきっと気のせいではないだろう。

「火炎球（フォイアー・クーゲル）！」

予想通り兄の発動した呪文は火炎の球を放つ攻撃呪文で、やはり予想通りこちらに向かって放たれた。

「兄さんっ！」
「大丈夫、それぐらい余裕で避けられる。ティアナなら弾き飛ばしたり叩き切ったりしてるし」
「俺は一般人っ・・・！」

俺の必死の叫びも兄には伝わっていないようだった。
勇者と呼ばれる人達と比べられても困るが、同じ技量を求められて

ももっと困る。
なんとかギリギリのところで火球は避けることができたが、色々と焦げた臭いがした。

「それじゃあやってみようか」

うんうんと満足気に頷いてこちらを促す兄。
焦げた箇所が気になっていたが、呪文はきっちり覚えていたので問題なく詠唱する事ができた。

「火炎球（フォイアー・クーゲル）！」

呪文を唱えるとかざした手からへろへろっと小さな火球が出現して、地面に落ちる。
ぽひゅっと変な音を立てて火球は消滅した。

「小さい・・・」

がっくりと肩を落とすと、ぽんぽんと兄に肩を叩かれる。

「いや、発動するだけで十分だ。もしかしたらもっと上級の呪文でも・・・」
「え・・・？」
「よし、物は試しだ。次やってみようか」

キラキラと眩しい笑顔で言ってはいたが、その笑顔に黒いものを感じずにはいられなかった。

22：聖誕祭の思い出　3

「振弾撃（シュタルク・シュヴィンゲン）！」

詠唱時に光の輪をまとった兄が放ったのは初めて目にする呪文だった。
ある程度以上の呪文の詠唱時に現れる光の輪。
放たれたのは明らかに危なそうな代物だ。

「うわわっ！」

再びギリギリのところで避ける。
どうんっ！
地面に着弾したソレは激しい音を立てて地面をえぐり取った。
つぅと冷たいものが背筋を伝う。
死ぬ。当たったら間違いなく死ぬ。

「ちなみに詠唱なしだとこんなふうに連射もできる」

兄の周りに再び光の輪が現れる。
こちらに向けてかざした手に魔力が集まっているのがわかる。
あの危険物を本気で連射してくる気なのは明らかだ。
それに対してこちらは今日始めて魔法を使ったばかりで対抗する手段は無く避けるしかない。

「たぶん当たっても死にはしないだろうから。痛いだけで」
「死ぬと思うっ！」
「ほら、いくよ？」

やはりこちらの意見など聞いてはもらえず、次々と先ほどよりは多少小さいサイズの弾が撃ちだされる。
それでも適当に放っているだけのようで、数は多いが十分避けることができていた。
どかっ！と激しい音をたてながら周りの地面をえぐっていく魔力弾。
見た目と聞いた呪文の詠唱のイメージから高振動の魔力弾を撃ちだしているようだ。
死なないかもしれないが瀕死にはなるであろう破壊力。
とにかく兄の気が済むまで必死に避けるしかない。

「こんな感じだけど、わかったかい？」

息も切れてそろそろ限界というころ、やっと兄が攻撃の手をゆるめた。

「わかっ・・・た、から・・・・っ・・・・」

やっと開放されると思ったその時。
避け続けていたがゆえにできた地面のえぐれに足を取られバランスを崩してしまった。
すでに体力も限界で踏みとどまる事も出来ずそのまま倒れる、と思った瞬間。

「ルッツ！」

兄の叫び声に振り向けば目前にせまる魔力弾。
ヤバイとは思ったがどうすることもできず、次の瞬間わき腹辺りに強い衝撃を受けて後ろに吹き飛ばされごろごろと地面を転がる。
起き上がる事もできず、何本かアバラもやられている様で声も出ない。

うまく呼吸することも出来ずに息が詰まる。
朦朧とする意識の中で、兄が結界を解いたことを感じ取る。
そして再び魔力に包まれどこかに転移したことを感じたが、どこへ移動したのかはわからなかった。

「・・・・・！」

薄れていく意識の中、誰かが呪文を唱えているのを感じた。
少しだけ緩む痛みの波。
きっと回復呪文を誰かがかけてくれたのだろう。
そのイメージだけを頭にしまいこんで、俺は完全に意識を手放した。

「ルッツがエリクに抱えられて医務室に転移してきた時はホント驚いたぞ」
「そうそう、確か私と手合わせしてモロに腕に剣を受けて治療していたんですよね。模造剣でよかったですね？」
「・・・そうだったな。十二歳のいたいけな王子に容赦なく攻撃してくれたよな」
「そういう鍛錬でしたから」

フェルにジト目で睨まれてもターヴィは全く気にしていない様子で懐かしそうに遠い目をしていた。
結局俺は意識が戻った後、療養も兼ねてすぐに家に戻ったので怪我についてどういう説明がされていたのかは知らなかった。

フェルの話によると兄は言葉を濁して明確な説明をすることはなかったらしい。
しかし城を出てすぐエリクのファンに囲まれたところを目撃されていた事。
結界が張ってあった為、兄の魔法で瀕死の怪我を負ったことは知られていなかった事。
そのことから、あの怪我はエリクのファンによるものだろう推測されていたらしい。
そして兄がこの怪我の事は内密にして欲しいと頼んだ為、事件として扱われる事もなくそれ以上詮索されることもなかったという。

「実際は？」

にやり、と笑いフェルが問う。
兄のことをよく知っているフェルだからこその質問。

「犯人は兄」
「やはりな」

くくっと声を殺してフェルが笑う。
そんなフェルにターヴィが声をかける。

「フェル様、そろそろ・・・」
「そうだな。明日は母上との面会があるのだからな」
「・・・はぁ。気が重いよ」
「ははっ、では失礼するとしよう。今日はゆっくり休んでくれ、お客人」

最後だけ何となく王族っぽい口調で席を立つフェル。

「それでは失礼致します」

ターヴィがきっちりと騎士らしく礼をし、フェルに従い部屋を後にした。

静寂が訪れた部屋の中。

聞こえるのはヴァイスといつの間にか眠っていたライゼの寝息のみ。

俺もさっとシャワーを浴びてベッドに横になる。

明日のことを考えると気が滅入るが、疲れもあってすぐに眠りに落ちたのだった。

２３：再会の朝

ベットから起き上がり、ぐっと伸びをしてから上着に腕を通す。
カーテンを開けば部屋に朝日が差し込む。
今日も天気はよさそうだった。

ヴァイスとライゼはまだ夢の中。
口元をもごもごと動かして幸せそうな寝顔のヴァイスは普通の子供にしか見えない。

「二人とも起きろ。朝だぞ」
「んっおはよー、にーちゃ」
「おはよう、ヴァイス。ライゼは・・・」
「うー・・・体中が痛い」

目をこすりながらヴァイスが起き、ライゼはベットの中で唸る。
しっかりと昨日の魔法の反動がでているようだ。

「その様子だと今日は動くのは無理そうだな。ま、一日休んでいればかなり楽になるはずだ」
「う・・・」
「大人しくしてろ。食事は適当に枕元に運んでもらえるように頼んでおくから」
「・・・・・」

こんな時の一番の回復方法は休養を取ることだ。
かなり不機嫌そうにぶすっとしたライゼだが、動くのはかなりつらそうな様子で上体を起こすことすら出来ないでいる。
サイドイッチの類ならば行儀は悪いが寝たままでも食べられるだろ

う。

「ほらヴァイス、上着を着て。すぐにお迎えがくるから」
「おむかえ？」
「ほら、来たようだよ」

言い終わると同時にドアがノックされる。

「おはようございます、ルッツさん。お食事の用意が出来ていますのでご一緒願えますか？」
「わかった、すぐに出る」

ドアの向こうから聞こえたのはターヴィの声。
メイドではなくターヴィが迎えに来たということは・・・

予想通り案内された部屋は王宮の奥にある、主に国賓が通される広間だった。
長机の先に座っているのは王子スマイルを浮かべたフェル。

「やぁ、よく眠れたかな？」
「うんー」
「それはよかった。それじゃあ一緒に朝食を食べようか」
「わーいごはんー！」
「どうぞ、こちらの席におかけください」

いつの間にか控えていたメイドさんに促され席に着く。
ターヴィはフェルの後ろに控えていた。

「ところでルッツ。客人はもう一人いたと思ったのだけど？」

「あぁ、昨日ちょっと無理させたからな。魔法の反動で寝込んでるから後でサンドイッチでも持っていってやってくれないか？」
「それは構わないが・・・やはりエリクの弟だな」
「どういう意味だ」
「大丈夫だと思ったら容赦がないところとかだよ」

失礼な話だ。
ライゼの場合は体力回復の為の魔法であって決して命に関わるようなものではなかった。
それに比べて兄の場合の俺は瀕死の状態になったのだ。

「全然違うだろ」

ちょうどそこへ朝食のパンが運ばれてきた。
俺は釈然としない気分をまぎらわすようにばくりとパンを頬張った。

「程度が違うだけでやってる事はそっくりなのになぁ」
「ですねぇ」

フェルとターヴィが可哀相な子を見るような目でこちらを見る。
隣では俺の真似をしてパンを頬張ったヴァイスがパンを喉に詰まらせてしまい、慌ててミルクを飲ませ流し込ませる。

ヴァイスが落ち着いたところでターヴィに声をかけられた。

「子供は思ったより大人を見ていて、真似するんです。気をつけないとダメですよ」
「そうだな・・・」
「ヴァイス君、食べ物はゆっくりよく噛んで食べなくちゃダメですよ」

「うん、ごめんなさい」
「ぷっ・・・ルッツ、やけに素直じゃないか」
フェルが肩を震わせつつ笑いを押し殺す。
そんなフェルを振り返りターヴィがため息をもらす。
「フェルディナンド様、素がでてます。いくら幼馴染とはいえメイドたちの目もありますから、王子らしく威厳を保ってください」
「こほん、そうだな」
「イレーネ様もお待ちなんですからね。忙しい方ですから、約束の時間は守りませんと・・・」
「そうだったな。ルッツ、悪いがイレーネ様の都合でこの後すぐの面会だ」
「わかった」
それからは他愛もない思い出話などして食事を終えた。

食事の後案内された王宮の奥にある神殿。
入れる者は一部の限られた者だけの神聖な場。
その中心には奥の祭壇を見つめているのだろう、こちらに背を向ける形で一人の女性が佇んでいた。
「イレーネ様、ルッツ様をお連れしました」
ターヴィが膝を付いて礼の姿勢をとる。
「ターヴィ、ご苦労様でした」
「はっ」

女性は向きを変えることなく答える。
それでも再び頭を下げてターヴィは後ろへと下がり、変わりに俺とフェルが前に立つ形となった。

２４：神託の巫女

「久しぶりですね」

女性はくるりと振り返り、にっこりと微笑みかける。
兄エリクによく似た笑顔で。

「急に呼び出したから驚いたでしょう、ルッツ」
「それはまぁ・・・それよりどういった用件ですか、母さん」
「相変わらずあっさりした態度ね。母さん寂しいわ」

姉によく似た外見のこの人は俺達の母親であるイレーネ＝ツェルニー。
しかし兄や姉と並べば姉妹にしか見えないほど若く見える。
正確な年齢は本人が頑として教えてくれないのでわからないのだが、
兄と姉が二十四歳だということを考慮すると四十代以上だろう。

そんな母は神託の巫女と呼ばれる存在だ。
神託の巫女とはその名の通りに神の声、つまり神託を聞く事が出来る存在。
その力でここぞという時には国を救うような神託を受けていた。
王族からも様付けで呼ばれる事からもその重要性が伺え、神託の巫女の命は王からの命と同等となる。

「用件はね、あなたに会わせようと思っている人がいるの」
「会わせたい人？」
「えぇ。すでに会ってしまったみたいだけど」

母が視線をヴァイスへ移す。

「・・・ヴァイスですか」
「えぇ、白竜の子供であるその子よ」
母はやれやれといったように大きく息をつき言葉を続ける。
「ティアナに保護を頼んでおいたのだけど、まさか一緒に来るとは思わなかったわ」
さすがに神託の巫女と呼ばれる母は一目見ただけでヴァイスが白竜の子供であると見抜いたらしい。
「白竜の子供・・・？人の姿を取れるのか」
「あの時の光はブレスだったんですね」
「うんー」
「人の姿になれる竜なんて初めて会ったよ」
「ふふふ、すごいでしょ！」
フェルとターヴィはしきりに感心しヴァイスと話していた。
母があっさりとヴァイスの正体をばらすようなことを言ったということは、この二人はそのことを知っても問題がないということなのだろう。
「神託とやらはなかったんですか」
「神託なんて気まぐれな物。そう都合よくあるわけじゃないわ」
そこでふっと母の表情がすこし険しいものへと変わった。
視線の先にいるのはヴァイス。
「重要な存在だからティアナに保護させたのだけど・・・ルッツと

主従の契りを結んでいるみたいだし、これからはあなたが保護するしかないわね」
「は？契りなんて結んだ覚えは・・・」
「したよ！ぼくがにーちゃのおとーとになるって！」

ヴァイスがいう弟というのは、旅の途中で宿などで説明する時に楽だからと兄弟のフリをしようと言った時のことだろう。

「あれが契りなのか？」
「契りは竜が主を主と認めたときに交わされるもの。形式があるわけではないわ」
「そういうものなんですか・・・」

主従の契りは一度結ばれると主人が死ぬまで破られる事は無く竜は主を守り、尽くす。
主は竜に自身の持つ魔力を分け与え、竜は主の魔力を得る事によってその力を増す。
竜にとって主は命と同様に大切な存在となるので容易に契りを結ぶ事はない。

「俺が主・・・か」
「それよりもう一人、会わせたい人がいるのよ」

これまでの流れを無視して母が話しを切り出す。

「こちらに」
「はい」

母の呼びかけに答え、神殿の柱の陰から姿を現したのは俺の知っている人物だった。

「レティ・・・？」
「けっこうすぐだったね」

ふふっと笑うレティは以前見た騎士学校の制服ではなく、正式な騎士服を着ていた。
服のせいか、すこし雰囲気が違うというか違和感がある。

「学生じゃなかったのか？」
「学生だったよ、昨日までは」
「彼女は特別なの」

母がすっとレティの横に移動しレティの肩に手を置く。
特殊な母に特別と言われるとは、どれだけすごい事なのか。
神託の巫女の跡取りだとか、実は精霊だとか言われてもおかしくはない。

「特別とは？」

それまで後ろで様子を伺っていたフェルが口を開く。
黒髪・黒眼というめずらしいレティの容姿に興味を引かれ、思わず質問してしまったようだった。

そこでふと違和感の正体に気付く。
以前のレティの瞳は緑だったはず。
黒い騎士服を身に纏うレティは全身黒ずくめだった。
黒ずくめだが決して怪しいというわけではなく、レティに良く似合っていてた。

この世界に黒い瞳の人間がいるという話は聞いた事が無い。

何やら面倒な事になる気がしてならなかった。

25：運命の姫

「特別というのも気になるが・・・レティ、その瞳の色は・・・」
「あー、コレはね・・・」
すっとレティが自分の瞳の下に手を添える。
レティが口を開きかけたその時、母がレティの言葉を遮るように前へとでる。
「先に自己紹介をしてちょうだいね？」
「あ、はい」
母に促されレティが一歩前へ出る。
母の顔に浮かぶのはにんまりと表現されるのがぴったりの笑顔。
「ぼくねーちゃのことしってるよ？」
「ふふっ白き竜の子、後ろの王子様達は彼女の事を知らないのよ。
それに・・・ふふふ」
「母さん、笑顔が気持ち悪・・・・・」
ヴァイスに微笑みかける母の笑顔がすさまじかったのでつい本音が漏れる。
もちろんその瞬間、どこからともなく母が取り出した錫杖で殴り倒された。
「さぁどうぞ」
地面に沈んだ俺を無視して母がレティを促す。

「あ・・・はい」
ちらちらとレティがこちらを気にしているが、俺がその場に座りなおして大丈夫だと手を振ってみせると小さく頷き一呼吸おいて顔を上げる。
「はじめまして、片瀬菜月です」
レティが口にしたのは聞きなれない響きの名前。
「カタセ・・・ナツキ・・・・・？」
「あっ、ナツキのほうが名前で・・・」
レティの言葉を復唱する。
聞き覚えのない名前。レティシア、それが彼女の名前だったはずだ。
レティは一呼吸置いて言葉を続ける。
「この世界での名前はレティシア＝ルグランといいます。レティ、と呼んでください」
「この世界・・・？」
この世界での、とはまるでレティがこの世界の住人ではないというような言い方だった。
この世界の人間にはありえない黒い瞳。
しかしレティがこの世界の住人ではないのであれば納得がいく。
「初めましてレティ。私は第二王子のフェルディナンド。ルッツとは幼馴染だ」
「私はフェルディナンド王子付きの騎士のターヴィです。よろしく

お願いします」
「こちらこそよろしくお願いします」
俺の横でフェルとターヴィが簡単に挨拶を交わしていた。
ヴァイスは不思議そうな顔をしながらぴったりとレティにくっついていた。

「イレーネ様、彼女が特別だというのは・・・」
「彼女がこの世界の人間ではなく、異界からの旅人だということよ」
「しかしイレーネ様、異界の旅人とはいえ過去にも前例があるのでは？」
「えぇ、そうね。でも・・・」

ターヴィの問いに母が答え、それにさらにフェルが尋ねる。
フェルの言うとおり、異界の旅人は良くある事ではないが、過去前例がなかったわけではない。
数十年に一度ぐらいのペースで確認されている。未確認を含めればさらに数は増えるだろう。
記録によると異界の旅人達はそれぞれの世界の知識を生かしこの地で生活をしていたらしい。
ある者は学者として成功し、またあるものは料理人となり成功を収めたという。
しかし王に謁見などすることはあっても、レティのように神託の巫女に特別だと言われるようなことはなかった。
つまりレティの場合は・・・

「レティの場合は神託があったということですね？」
「そう、『運命の姫』が現れるとね」

予想通り、というべきだろう。

神託で運命と言われる存在、つまりそれはこの国に深く関わるとされる存在となる。

「彼女は国に保護される存在だということですか？」
「そうなるわね。但し彼女がそれを必要とするならばだけど」
「彼女の立場ならば城で保護されることになるのでは？」

どう国の運命に関わるのかは不明でもレティは国の重要人物という立場だということ。
それは紛れもない事実。
レティが普通の少女であったならば城で保護され姫同様に過ごす事になるのだろうが・・・
それならば近衛騎士のターヴィが知らなかったというのが不自然だ。

「この国の中に彼女を狙う不届き者がいるのよね」
「それこそっ！我々が彼女をしっかりと護衛すべきでは・・・！」

真面目なターヴィが声を荒げる。
どんなに良い国だろうが不穏分子は必ずといっていいほどどこかに存在するものだ。
すべての人間が満足することなどありえない。
満たされれば欲が出る欲深い人間がいる。

「城にも彼女を狙うものがいるということですか。しかし騎士も無能ではない。狙うものがいても外で生活するより安全では？」
「私もそう言ったのだけど・・・」

ターヴィ達騎士を庇うように母に質問をするフェル。
なんだかんだと言いつつフェルはターヴィを信頼している。

「レティシア、王子様もこう言ってるし城で過ごしてみたらどうかしら？」

「遠慮します」

レティに即答されてターヴィががくりと床に膝を付いた。

26：呼びかけ

何故、とターヴィに詰め寄られたレティ。

「根っからの庶民なので落ち着かないから・・・です」

答えは俺達の想像の斜め上をいくものだった。

「しかし・・・いくら落ち着かないとはいえ、命を狙われているような状況では・・・」

「ふむ、では護衛の騎士だけでもつけるというのは？」

「そうなんだけど・・・私も護衛は必要ないと思うのよね」

「・・・は？」

フェルの提案も母にあっさりと否定される。

しかし俺も護衛をつけたほうがいいのではないかと思う。

命を狙われているのであれば用心するにこしたことはない。

「ただ必要ない、と言われても納得できないでしょうし・・・そうね、ルッツ」

「ん？」

突然話を振られ慌てて顔を上げる。

「エリクを呼んでくれないかしら？」

こてっと首を傾げて上目遣いでこちらを見つめる母。

知らない人間から見ればかわいらしい女性と映るのだろうが息子である俺にされても気持ち悪いとしか言いようがない。

「いいから早く呼んで？」

ふふっと微笑む母の口元は笑顔の口元だったが、目元はこれっぽっちも笑っていない。

とてつもない威圧感を放っている。王族であるフェルなど目じゃない威圧感だ。

「どうやって呼べというんですか。連絡手段なんてないですよ」

「何いってるの。呼べば来るわよ」

何バカな事言ってるのこの子は、といわんばかりの母。

呼べばくるとかありえないだろうと思いつつ、ふと頭を過ぎる兄の言葉。

「そうだな、『助けて兄さん！』って叫べば助けに来てあげるよ」

ないない、これはない。

恥ずかしい云々ということもあるが、そもそも普通に叫ぶだけでどうして俺に呼ばれたことがわかるどころか俺の居る場所がわかるというのだろうか。

いや、あの人外の兄だからありえなくはないが・・・あって欲しくはない。

「ほら、早く」

「エリク兄さんー・・・」

急かされ、とりあえず呼んでみるがその場を支配するのは静寂のみ。
皆どうやって呼ぶのかと俺に注目している。
はっきり言ってこれはかなり恥ずかしい。

「ほら、ちゃんと呼ばなきゃ来てくれないわよ」

しかし母から発せられる威圧感はさらに強くなり、俺は半ば自棄になって叫ぶ。

「助けて兄さんッ！」
「何だい？」

ぽんと肩に手を置かれ振り返ればそこに立っていたのは兄エリク。
おもわずぽかんと口を開けたまま兄の顔をまじまじと見る。

「何だ？そんな間の抜けた顔をして」
「兄さん・・・？どうして・・・」

本気で人外な兄は呼ばれてここへ来たというのだろうか。

「母さんに呼ばれていたから来たんだけど・・・早く来すぎたかな？」
「いいえ、時間ぴったりよ」
「ちょ・・・まさか・・・！」

ハメラレタ！

そう気付いた時にはすでに遅く。
可哀相なものを見る目でこちらを見ているレティに爆笑しているフ

ェル。
そんなフェルを宥めつつ笑いを押し殺しているターヴィがそこにいた。
ヴァイスは不思議そうな顔をしながらレティに手を繋がれている。

「ふふふ、良いセリフが聞けたでしょう？」
「ええ、可愛い弟に助けを求められるのもいいものですね」
「二度と言うかーッ！」

きっと真っ赤になっているであろう顔を隠すように俺は後ろを向く。

母とはかなり幼い頃に別々に暮らすようになったので最初はあまり母の実感がわかなかった。
無意識に距離を置こうとしていたことに気付かれ、それでやたら俺にかまうのだろうと思っていた。
母の突拍子もない行動も、そんな溝を埋めるための行動なのだろうと思っていたのだが、完全に遊ばれているだけじゃないかと最近は思う。

27：白い世界

「さて、それじゃあエリク。どこか他からの干渉がない場所へ転移させてくれる？」
「干渉がない場所ですか・・・」
「ここでもよいのだけれど、さすがにちょっと手狭なのよね」

俺の醜態の事などすでになかったことのように話す二人。
今の俺では二人には適わないがいつか絶対見返してやろうと心に誓う。
かなり負け犬っぽい決意だが今の俺の実力では適わないのが現実なのだからしかたがない。

「・・・うん、あの場所がいいかな。それじゃあ転移させるから、俺の周りに集まってくれる？」

どこかいい場所を思いついたらしい兄が皆を自分の周囲に集める。
いつもならこの程度の距離にいるこの人数ぐらいならそのまま転移させてしまうのだが・・・ここから距離のある場所にでも転移させようとしているのだろう。
普段はあまり詠唱もしない兄がブツブツと小声で詠唱し、呪文を唱える。

それは聞いたことのない言葉で構成された呪文だった。
床に激しく光を放つ魔方陣が現れ、兄が力ある言葉を発した瞬間さらに激しく光を放つ。
光の洪水とでもいうような光に包まれ目を開いていられなかった。

「さぁ着いた。もう目を開けても大丈夫だよ」
兄の言葉に促されゆっくりと目を開くと、俺達は見たこともない場所にいた。
あたり一面に広がる白・白・白の景色。
足元も空も、すべてが白。
見渡す限り何もないその場所は地平線すらわからないほど白一色の世界だった。
白い世界にぽつんと俺達だけが立っていた。
「兄さんここは・・・？」
「んー、企業秘密」
ふふ、と人差し指を口元にあて、兄が微笑む。
どうやらここがどこだか教える気はないらしいことが態度でわかる。
「ここって・・・」
「あら、エリクったらここに転移する魔法が扱えたのね」
「うわぁ・・・どこまでも真っ白な世界ですね、フェル様」
「うむ、なかなか興味深い場所だな」
若干2名ほど・・・母とレティはここがどこだか知っているようだった。
母はともかくとして何故かレティが知っているのかが気になるところだ。
見渡す限り白い何もない世界など見たこともなければ聞いたことすらない。
しかし母の様子からとんでもない場所に転移したらしい、というこ

とだけはわかる。

「この場所なら暴れても問題ないけれど、長くは留まれないわね。さっさと用事を済ませましょう」

「用事というのは何故護衛が必要ないと思われるか、ですね？」

「ええ。同じ騎士同士、手合わせしてみるといいわ」

「しかしイレーネ様。彼女はまだ騎士になったばかりなのでは？ターヴィはこれでも一応近衛騎士ですから・・・」

やんわりと止めるよう声をかけるフェルだったが、もちろんそんなものを母が聞くわけもなく。

「いいからおやりなさい。手加減も無用です」

「はい・・・」

にこやかに命令され、もちろん断れるはずもないターヴィはあきらめのため息を漏らしつつ皆から少し離れた場所に立つ。

「レティシアさん、そういうわけですのでお手合わせ願います」

「はいっ、こちらこそよろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀をしてレティがターヴィと向き合う。

ターヴィはの人間が離れた事を確認すると、すっと腰に携えていた剣を抜き、構える。隙の無いその姿はさすが近衛騎士といったところだろう。

レティも背中に背負った剣を抜き構える。そう、腰に携える事の出来ないサイズの剣を。

「なぁルッツ。レティを見てると誰かとイメージが被るんだが・・・」

「これからもっとそのイメージの被りが酷くなると思うぞ」
「・・・同類か」

フェルがぽつり、と呟く。
ターヴィが構えているのは一般的なロングソードで片手剣。
レティが構えているのはツヴァイハンダーで両手剣。もちろん重そうな様子は欠片も見られない。
ちなみに姉のティアナが扱うのは自分の身の丈よりも大きな剣。
両手剣は姉ほど極端ではないにしろ一般的に女性が扱うことは稀だ。

ちらりと視線をターヴィに向ければ、困惑の表情を浮かべたターヴィ。
一方のレティはやる気満々、といった様子だった。

28：手合わせ　1

恐らくこの時のフェルの表情を忘れる事はないだろう。
美貌の王子サマがぽかんと大きく口をあけ目を見開いている。
普通ならばまず見ることの出来ない表情。
美形が間抜け面をしているとなんだかうれしいような気分になるのだから不思議だ。

何故フェルがこんなことになっているのか。その理由は簡単だ。
目の前で起きた現実が理解しがたいものだった、ただそれだけだ。
俺はあの母が関わっていると知ったからだろう。レティがいくら人間離れしていようが、関係者だからかしかたがないと妙な納得をしてしまっていた。

「では、始めてちょうだい」

なかなか動こうとしないターヴィに痺れを切らし母が開始を宣言する。
母の言葉に戸惑いつつも意を決したようにターヴィが息をつき、「いきます」と短く告げレティへと切りかかった。
ターヴィの実力は騎士の中でもトップクラス。対して最近まで学生騎士であったレティ。
もともとたいした距離のなかった間合いをターヴィが一気に詰めるがレティは一歩も動かない。

「おいっ、まさか彼女動けないんじゃないのか！？」

反射的に体を前にだすフェルを手で制して俺は首を振る。
騎士になりたてだろうが彼女の実力は本物で、何よりレティの顔に浮かぶのは微笑。
咄嗟の事に対処できずに戸惑っているのではない事は明白で、むしろターヴィの動きを観察しているかのような印象を受ける。

間合いを詰めたターヴィが一気に剣を振り払う。
しかしまだレティは動かない。

「っ・・・！」

隣でフェルが息をのむ。
次の瞬間にはターヴィの剣がレティを切り捨ててしまうんじゃないかというその時。
にっこりと、レティが微笑んだ。

「なっ！」

ターヴィが驚愕の声をあげる。
剣が当たるというその瞬間に、レティが目の前から消えたのだ。
正しくはレティはターヴィの後ろに回りこんだのだが、そのスピードは速くターヴィから見ればまるで消えたようにしか見えなかっただろう。
それでもさすが近衛騎士、反射的に体勢を立て直しレティへと向き直る。

「言ったでしょう？手加減は無用だと」

盛大なため息をつきつつ母が声をかける。

そう、ターヴィは手加減をしていたのだ。今の一撃もいつでも止められるという程度に。
しかしそれはあっさりとかわされてしまったのだが。

ターヴィの雰囲気が変わり、本気になったのだとわかる。
一方レティはちらり、と母に視線をむける。母がその視線を受け止め深くうなずく。
・・・すさまじく嫌な予感がした。
本気の二人がやりあえばとばっちりを受ける恐れがあるので、とりあえずこっそりフェルの後ろに下がっておく。
ちなみに兄はかなり離れた場所で、自分の周りにしっかりと結界を張っていた。

本気を出したターヴィ。
振るうその剣は先ほどとは比べ物にならないほど速度を増している。
対するレティは剣を片手で構え、楽しそうにターヴィを眺めていた。

次々と繰り出されるターヴィの剣を、あっさりとその剣で受けとめるレティ。
相変わらず剣の重さなど微塵も感じさせない動きだった。
攻撃を受けるごとにレティの表情が輝いていく。それは楽しくてしょうがない、といった表情だ。
レティの表情が輝きを増すほどターヴィの顔に驚きと焦りの色が浮かぶ。

「レティシア」

レティを呼ぶ母の声は明らかに飽きたといわんばかりの声色。
はっとしてレティが振るった剣は、ターヴィの剣を叩き折り弾き飛

ばした。

「あああっ！すいません、つい・・・！」

呆然とするターヴィにペコペコと頭を下げるレティ。
つい、であっさりとその勝負はついたのだった。

「そうか！あれだな！達人はどんな物にでもあるという粉砕点を見極める事ができるという・・・！」

人間理解を超えるものを見ると、傍から見れば無茶な理由をつけてでも納得をしようとするのだろう。
フェルが横でぶつぶつと大きな独り言を言い始めたのだった。

「レティ・・・つい、力加減ができなかった？」
「うっ・・・その通りよ、ルッツ」
「手加減されていたのはこちらのほうだったのですね。薄々わかってはいましたが・・・」

ターヴィはがっくりと肩を落とし、完敗ですと片手をあげる。
それを見て満足そうにうなずく母。

ちらりと振り返れば、大きくため息をつく兄。
見れば結界の上の部分がばっさりと切られ、霧散していくところだった。
どうやら叩き折られたターヴィの剣が当たったようだ。
兄の結界を破壊するその衝撃。
その威力の攻撃を受けて剣は折られてもその柄は握ったまま離さなかった。
そのことに俺は心の中でターヴィに賞賛を送る。

フェルにとって受け入れがたかった現実、それはあっさりとレティの勝利で終わった手合わせ。
国で一番の実力の騎士と言われるターヴィがあっさりと負けた。その事実がすぐには受け入れられないのだろう。
ターヴィ以上にフェルが呆然としていたのだった。

「ルッツ、彼女は・・・」
「だから姉と同類だと。はじかれた剣が兄さんの結界を破ったよ」
「・・・そうか」
「だから人であるターヴィと比べるのは間違っている」
「そうだな、ティアナさんと比べるようなものか」

ポンポンとフェルの肩を叩きつつ、恨めしそうなレティの視線には気付かないフリをする。
そして俺は一緒に旅をしていた時はあれでも遠慮していたんだなと今更思ったのだった。

29：手合わせ　2

ターヴィとレティの手合わせはレティの圧勝という形で終わった。
その結果に満足したような表情で母がこちらを振り返る。

「それじゃ次はルッツの番ね。レティシアに全力で呪文を放ちなさい」
「は？」
「魔道師にも対抗できるということも証明しないと心配は残るでしょう？」

唐突に告げられ、今度は俺が呆然とする番となった。
しかし攻撃魔法なら俺よりも適任者がいるはずだ。
その適任者を振り返れば、こちらが尋ねるより先に答えが帰ってきた。

「俺がやると広範囲の範囲魔法になるから絶対巻き込むと思うけど？」
「あー、それもそうか・・・」

兄は加減というものが苦手だ。
基本的に扱う魔法は広範囲高火力で、結界なしでは辺りに甚大な被害を及ぼす。
確かに手合わせとして人に見せる目的で魔法を使うということには向いていないだろう。
見た目も派手なものが多く、爆発なんてあたりまえで視界を遮られるものが多い。
その状態ではっきりと何が起きているのかを見極めることは難しい。

広範囲高火力に特化という偏った兄よりはその場に応じて呪文を使い分けられる俺のほうがこの場は適任なのは明らかだった。
しかたなく今度は俺がレティと向かい合う。
魔術師に対抗できると示す事が目的なのだからそこまで強力なものでなくていいだろうと思いつつも一応確認をとる。

「ちなみにどの程度の威力の魔法を使えばいいのですか？」
「ピンポイントで高火力なもの。純粋な魔力攻撃・・・聖雷破（ハイリッヒ・ドンナー）あたりがいいわね」
「上級呪文じゃないですか。さすがにそれは・・・」
「いいからやりなさい」

いくらなんでもそれはやりすぎだろうと異議を唱えようとするが、それはぴしゃりと遮られる。
聖雷破（ハイリッヒ・ドンナー）・・・まともに食らえばただで済むはずがなく、普通の人間が受ければ死に直結するような呪文だ。
フェルのような魔力の鎧を纏っているわけでもなく、ヴァイスのように魔力抵抗が高いわけでもなさそうだ。
レティからはまったく魔力を感じられない。それは自分を守る結界を張ることもできないということ意味する。
レティが魔法による攻撃から身を守るには避けるしかないだろう。
まぁレティのあの身体能力なら可能なのだろう。・・・姉の様に。

「はぁ・・・、わかりました」
「ごめんね、ルッツ」
「そうだわ、エリク。あなたはあちら側に」
「・・・あぁ、そうですね」

母に促され兄がレティを挟んで俺と反対側へと回る。
その行動にどんな意味があるのかはわからないが、諦めに似た気持

ちで呪文を唱え、放つ。

「聖雷破（ハイリッヒ・ドンナー）！」

威力は高いがいわゆる直線攻撃ともとれる呪文。
俺の手から放たれた呪文はバチバチと青白い閃光を放ちながらレティへと襲い掛かる。

姉のように叩き切るか避けると思い込んでいた。
レティが避けた時に被害を受けるのは兄なので威力も抑えなかった。
しかしレティはその場から一歩も動かない。動こうとする様子すらない。
脳裏を掠める最悪の事態。

あっという間に呪文の青白い光がレティを包む。
少し焦げたような臭いがして、続いて兄の悲鳴が聞こえた。
兄はどうでもいいがレティはどうなったのか。
レティに直撃したと思われる瞬間に光が強くなったこと。
少し焦げた臭いがしたこと。
それが呪文がレティに当たった事を物語っていた。

「ねーちゃ！」

ヴァイスの叫び声が遠くで聞こえた。
息が詰まってうまく呼吸ができない。
呪文を放ってから光が収まるまでは実際は一分もかかっていない。
しかしその短い時間がとてつもなく長く苦しく感じられた。

「眩しかったぁ・・・。やだっ服焦げちゃってる！」

長く苦しい時間を打ち消したのは思いのほか明るく元気そうなレティの声だった。

レティの言うとおり、彼女の着ている服の腹部が黒く穴が開いている。
焦げた臭いは彼女の服が呪文によって焦げた為に発生したものだろう。
しかし穴から覗くのは彼女の綺麗な白い肌。

「あーっ！背中にも穴が・・・」

体を捻って自分の腰部分の服を引っ張りつつ確認しているレティ。
彼女服の腰部分には腹部同様に黒く焦げ、穴が開いていた。
それは呪文が彼女の腹部を貫通したということに他ならない。
しかし彼女の腰も、腹部同様綺麗な白い肌で焦げた様子など微塵もない。

レティは魔力がないのだから回復呪文が使えるわけでもないし、この場にいる他の誰かが使った様子もない。
つまり彼女は呪文の直撃を受けたが、無傷だということ。
しかし魔力を込めて作られた普通の服よりずっと剣にも魔法にも耐性がある騎士服が焦げ落ちる威力を受けて、かすり傷ひとつ無いというのは普通ありえない。

驚愕の表情を浮かべる俺を見て、母はそれはそれはうれしそうに微笑んでいた。

30：規格外

「あーあ・・・この制服新品だったのに・・・」

大きなため息をつくレティはとても呪文をまともに受けた様には見えなかった。
まるで呪文など受けていないとでもいうかのように。
服を呪文が掠めただけだというのか。偶然服の前後が焦げただけだと。

「イレーネ様っ、彼女は一体・・・！」
「うふふふふ」

目の前の状況が理解できなかったのはフェルも同様だった様で、まだ手合わせの最中だったが母に尋ねる。
母はかなり上機嫌で、普段であれば即手痛いお仕置きがくるであろうフェルの行動にもただ含み笑いをしているだけだった。

「ルッツ、お前威力を抑え目にしたのか？」
「避けると思ったからな、するわけないだろ」

フェルの問いに、ちらりと兄に視線を向けつつ答える。
そこには少しだけ驚いた顔の兄。
悲鳴は聞こえたので掠りでもしたのかと思ったが、驚きはしたが結界が間に合い無傷のようだった。

「私でもあの呪文を食らえば吹っ飛ぶぞ！？」
「いやまて、吹っ飛ぶだけで済むのかお前は」

真顔で叫ぶフェル。
フェルの纏う魔力の鎧は思っていた以上に優秀なものらしい。

「ぼくも・・・しっぽがちょっとごけちゃいそう」
「・・・ヴァイス。人型の時に尻尾はないだろう」

さすが白竜、子供であっても魔力抵抗はかなりのもののようだ。
ヴァイスの言い方だと竜の姿のときは、とも考えられるがそれは後で確認すればいいだろう。

「さすがフェル様にヴァイス君。私ならコレがなければ間違いなくよくて瀕死ですよ」

国でもトップクラスの実力を誇る近衛騎士が一番普通の人に見えた瞬間だった。
それでも騎士を目指すものの憧れの存在であって、騎士団長同様に騎士のトップなのだが。

コレ、というのはターヴィの腕に着けられた上位の騎士のみに支給されている魔装具のことだ。
上位のみというのは貴重で高価な品である為で、その効果は装着者の展開する結界を強化するという補助具。
簡単な結界であれば呪文の詠唱なしに発動することができたりもする。
ちなみに兄のように自力の結界で聖雷破（ハイリッヒ・ドンナー）を防ぐことができるのは力のある魔道師でないと不可能だ。

「そうね、次は威力はどうでもいいから彼女に呪文を当ててごらんなさい。そうすればわかるわ」

ご満悦な母を横目に、俺は多分正解であろう答えに検討をつけていた。
それを判別できる呪文・・・何種類か思いつくものはある。
そしてその何種類かに問題があることも。

「あっ！服が焦げちゃう呪文はやめてね！」

はっとしてレティが叫ぶ。
どうやら彼女も問題点に気づいたらしい。

「・・・わかってる」

ふう、と息をついて唱えていた呪文を発動させる。

「空弾舞（クーゲル・ロンド）！」

俺の前方に無数の空気の塊が発生し一気にレティへと襲い掛かる。
念の為に威力を抑え、その分空気弾の数を増やすアレンジを加えたオリジナルバージョンだ。
通常強いパンチ程度の威力の空気弾を多数発生させる呪文で、空気弾もある程度コントロールが可能。
その為牽制目的で使われることの多い呪文で、威力をさらに抑えた今ならぺちっと叩かれた程度の威力しかない。

「うわぁー、すごい」

一気に迫りくる空気弾を眺めつつ感心するレティ。
彼女に焦りの色など微塵もない。
そして空気弾がレティへと到達し、弾けた。

予想は確信へと変わる。

やはりレティが呪文を避けることはなかった。
空気弾は彼女を襲ったが、彼女の服を揺らしただけ。
決定的だったのは空気弾が彼女の長い髪に触れたが、髪を揺らすことはなかった。
服の生地があるところは何かしらの影響が出ていたが、彼女の体のみに触れた空気弾はまるで彼女など存在しなかったようにすり抜け、他の空気弾とぶつかり弾ける。

「・・・そういうことか」
「どういうことだ？」

全然わからない、というようにフェルが尋ねる。
ヴァイスが気づいているのかはわからないが、ただ感心したように目を輝かせている。
ターヴィは信じられないといった表情だ。
同じ魔道師である兄は気づいているようだった。

「なるほど・・・魔力無効体質、とでもいったところですか」

すっかり落ち着きを取り戻した兄がつぶやく。

「魔力が効かない？そんなバカな・・・ありえない！」
「本当に、どこまでも規格外だな」
「あはは・・・」

フェルの言う通り、魔力の効かない人間などありえない。
それは異界の旅人であっても例外ではない。
信託といい魔力無効体質といい、どれだけイレギュラーだというの

か。

未だに笑みを浮かべたままの母を見ると、まだ何かあるんじゃないかという気すらする。

俺の大好きな「普通」や「平穏」といった言葉はすっかりなりを潜めていた。

31：世界の理

フェルが信じられないのも無理は無い話しだった。

セーゲンと呼ばれるこの世界はすべての根源に魔力が存在する。
大地や風・水・火などの四大元素は言うまでも無く、すべての生物や植物・鉱物にも当てはまる。
どんなに微量であっても、この世界に魔力のまったく無いものは存在しないのだ。
加工してあっても元となるものに魔力があり、形が変わっても魔力は残る。
もちろん人も魔力量の違いはあれど、皆無ということはありえない。
しかし呪文として発動できる魔力量を持つ人間は少なく、呪文を扱うことのできる人間は魔道師と呼ばれる。

異界の旅人は理由は解明されていないが、やはり魔力を持っていた。
その魔力量はさまざまで、魔法の存在しないという世界から来た者でも必ず魔力を有していた。
この世界へと渡った際に魔力を持つのではないかと言われているが、その真偽は定かではない。

魔力は魔力に影響を及ぼす。
その為魔力が効かない人間などこの世界には存在しない。
レティはこの世界の人間ではないのだから、前例がないだけでありえるのかもしれないが、それはとても確率の低い想像でしかない。

「・・・そろそろ戻ったほうがいいわね」
「そうですね、限界・・・でしょう」

ぱんっと手を打つ音が響き、はっとして我に返る。
「そこの呆けてるあなた達、エリクの近くに集まりなさい」
ふっと鼻で笑いつつ、母が俺達を呼ぶ。
兄の元へ集まるということは神殿へと戻るということだ。
しかし戻る前に俺には確認したいことがあった。
「ちょっと待ってください。最後に一つだけ確かめたいことが・・・」
「・・・わかったわ。ただし手短に」
「はい」
しょうがないわね、と言いつつも許可をくれたことに感謝しつつレティへと向き直る。
魔力にまったく影響されないレティだが、もしかしたら・・・
「レティ、試したいことがあるんだ」
「え・・・何？」
レティの隣に立ち、ぽんと左手に炎を出す。
詠唱も無しで出したごく小さな炎。
その炎を維持したまま右手で再び詠唱せず風を起こす。
炎ではなくその上部の空気を魔力で起こした風でレティへと向ける。
「あつっ！」
ぱっと俺との距離をとるレティ。
「・・・なるほど」

「あー・・・」

はっとして苦笑いを浮かべるレティ。

「どうして熱がったんだ？呪文は効かないんじゃなかったのか？」

考えることを放棄したフェルが尋ねる。

見た目に反して肉体派な王子様は魔法についての知識が薄い。

「直接魔力を向けたんじゃなくて、魔力で暖めた空気を向けてみたんだ」

「なるほど！さすがルッツさん。考えましたね」

「はぁ？どういうことだ、ターヴィ」

「有効かどうかわからなかったから試したんだがな」

わかっていないフェルは無視してターヴィに答える。

もしかしたらと思いついただけで、実際有効なのかどうかは半信半疑だったが・・・有効だったらしい。

「つまりですね、フェル様。魔力そのものによる影響はなくても、魔力に影響されたものは有効だということです」

「は・・・？」

「例えば今の空気ですが、ルッツさんが呪文によって暖めたものです。炎自体をぶつけてみても、レティさんはすり抜けてしまいます」

「あぁ、それはわかる」

フェルの答えに満足そうに頷き、ターヴィは続ける。

「炎は純粋な魔力の塊ですが、暖められた空気は魔力によって干渉は受けていても魔力の塊ではありません。彼女は魔力自体の干渉は

受ける事がなくても、それ以外の要素を含んだ干渉は受けるんですよ」
「あー・・・わかったような、わからないような・・・」
「つまりな、フェル。呪文によってその辺の岩を割ったりして発生した石つぶてとかは当たるってことだ。わかるか？」
「ふぅん・・・じゃあ俺の攻撃も一応当たるってことか？」

埒が明かなさそうな気がしたので横槍を入れる。
この質問をしたということは、何となく理解できたようだ。

「そうですねぇ・・・フェル様がいつものようにレティさんに殴りかかったとしましょう。魔力が込められたフェル様の攻撃は岩でも砕く威力を発揮できますが、彼女にはただのパンチとしてしか威力を発揮できないということです」
「魔力部分は無効だが殴る、という部分は有効だということか？」
「そうなります」
「そうか」
「さぁ、わかったところで戻るわよ。もう待てないわ」

痺れを切らした母に急かされ、兄の周りへと集められる。
そして来たときと同じように俺達は兄の転移魔法で神殿へと戻った。

神殿に戻り兄はふぅと一息つく。
心なしかもともと白い肌の兄だが、さらに白く生気が無いように見えた。

「俺は少し疲れたので休ませてもらいますね」
「えぇ、お疲れ様エリク」
「ではお先に失礼します」

そう言って兄は神殿を後にする。
あの転移魔法、実はかなり体に負担がかかっていたようだ。
呪文の内容はしっかりと頭に残っているが使わないほうがよさそうだなと思いつつ、俺に言ってくれればライゼに使いまくった体力回復の呪文をかけたのになぁと思う。

そしてライゼの存在をすっかり忘れていた事に今更気づいた。

３２：最強と最弱

夕食は有難くない事に、母主催の小さな晩餐会が開かれることとなった。
晩餐会といっても、招待客は先ほど神殿に集まっていたメンバーのみの小さなものだ。

指定された時間まではまだしばらくあったので、すっかりと忘れていたライゼの様子を見に部屋へと戻ることにした。
それを伝えると明らかにつまらなさそうな表情をするフェル。
しかしターヴィに何かを耳打ちされるとぱっとその表情は明るくなった。

あれは間違いなく、ろくでもない事を吹き込まれた顔だ。

「それじゃあ俺は自室で少し休むかな。またあとでな」
「それでは失礼致します」

やたらニコニコと笑顔を振りまきながら、フェルとターヴィはフェルの自室へと戻っていった。
その場に残されたのは俺とヴァイスとレティ。
いかにも何か企んでいますといわんばかりのフェルの態度にあきれながらもレティへと向き直る。

「・・・あふぉ王子は放置するとして、レティはあの人と一緒に行かなくてよかったのか？」
「あの人ってイレーネ様？」
「あぁ」

尋ねると、レティは不思議そうな顔をする。

「うん、料理で忙しいからその辺を見てきていいって。それよりルッツはどうするの？」

命を狙われているにしては警戒が足りないような気もするが、色々と人外な仕様のレティなので気にしたら負けなのかもしれない。

「俺達も部屋に連れを残したままだから一旦戻るつもりなんだけど・・・」

「連れ？」

「人外でヴァイスの下僕」

「ちがうよー、らいぜはおともだちなの！」

的確な表現だと思ったのだが、ヴァイスにぷくーっと頬を膨らませて反論された。

そんなヴァイスをレティは「可愛い可愛い」と撫でていた。

「せっかくだから挨拶しにいこうかな」

「うんっ、ねーちゃもいっしょ～！」

俺の返答など待たずにヴァイスがレティの手を引いて走り出す。

ふと違和感を感じて目を凝らせば、うっすらと浮かび上がる魔力の糸。

恐らく通過する人間を感知するタイプの情報系の魔法といったところだろう。

先程通ったときはなかったので神殿に行っている間に何者かが設置したと思われる。

レティを狙うという者なのか、王家の権力争いの関係の者の仕業か。
どちらにしても大した害はない魔法だが、目障りなので消そうかと思い手を伸ばしかけたその時。

ぷつん、と魔力の糸があっさりと切れ、消え去った。

「あれ、今何か光った？」
「さー？ねーちゃ、はやくいこー」
「うーん、そうだね」

糸が切れた時に火花のようにパチっと光ったことに気がついたらしいレティだが、魔力皆無の彼女には何が起こったのかわかっていないようだった。
逆に魔力の高いヴァイスだが、魔力抵抗値が高すぎた為に魔力の糸が耐え切れず焼き切れてしまったというところか。
今の様子からすると、糸の設置者にヴァイスが通過したという情報は伝わらずに消滅したようだ。
それにしても子供だからなのか、ヴァイスは魔法に対する防御のみが高いだけで感知能力は低いようだ。

少々拍子抜けした感が否めないが、問題が起きたわけでもないので放置しておくことにする。
・・・面倒だし。

「頼もしいかぎりだな」

ふっと息をついて二人を追いかける。
やはり王宮というところは陰謀というヤツが渦巻いているようで嫌になる。
普通とはかけ離れた世界だし。

一方部屋で待っていたライゼは不機嫌だった。
ぶすっとした表情でベットに腰掛けている。
その傍らにはヴァイスとレティ。
不機嫌の理由はその体調と、レティにべったりなヴァイスの様子からだろう。
起き上がれる程度には回復しているあたり、へたれとはいえドラゴンの端くれだけはある。
もしくは絶対値が低すぎて回復速度も速いということだろうか。
まぁそんな事はまずありえないのでやはりドラゴン補正というものだろう。

「ヴァイス、その人間は・・・？」
「ねーちゃだよー」
「レティシアです。よろしくね」
にっこりと微笑みかけるレティとは対照的に、警戒する様子を隠そうともせずにライゼはレティを睨みつける。
「えーっと・・・ルッツ？」
困った様子のレティがこちらに振り返る。
「ソイツは自分より強いと認めればあっさり懐くから大丈夫」
「ちょっとまて」

「ふんふん、強いと認めてもらえればいいのね。あ、ちょうどいいところに果物ナイフが」

サイドテーブルに置いてあった果物と果物ナイフを見つけ、レティがナイフを手に取る。

「果物ナイフなんて学校で火竜討伐の実習に参加した時ぐらいしか使った事ないけど、大丈夫かなぁ？」

「実習で火竜討伐だなんて、さすが騎士の学校だな」

「ちょっとまて、驚くポイントが違うだろ」

レティの言葉に感心している俺にライゼがつっこむ。

「あぁ、そうだな。本来の使用目的に使ったことはないのか？」

「・・・ない」

「そのポイントでもないだろ」

レティに聞きなおした俺に、ライゼがさらにつっこんだ。

「とりあえずかるーく手合わせしてみる？」

レティが微笑みながらその感触を確かめるように軽く果物ナイフを一振りすると、何故か衝撃波が発生し、床板の一枚がパキンと割れた。

そんなつもりはなかったのだろうオロオロするレティ。

ライゼはちらりと視線を床板に移すと「遠慮します」と光のような速さで土下座した。

さすがライゼ、清々しいほど見事なヘタレっぷりである。

33：母の手料理

その日の夕刻、神殿の一角で激しい爆音が響き渡った。
音源は神殿の奥にある厨房。
厨房でありながら爆発・爆風のみに特化した結界を張られた場所でもある。
激しい爆音が響き渡る神殿で、その神殿を守る神殿騎士たちには少しも焦りの色はなくただただ溜息を零していた。

「これから料理をします」
「あー・・・、はい了解致しました」

そんな会話を神殿の主であるイレーネとしたのが半刻ほど前。
その厨房はイレーネ専用ではあるため普段は使われることはない。
神殿にも厨房はきちんと設備されており、料理人も勤めているのだから。

「やっぱりたまに会う子供には手料理を作ってあげたいものよね」

そんな年に一度あるかないかという理由で、神殿内に自分専用の厨房を作ったらしい。
そこまで頻度が少ないのだから子供が来たときだけ厨房を借りればよいのではないかと思うだろうが、それには大きな問題があった。
あの人が料理をすると必ず爆発が起こるのだ。
たとえそれが火も油も使わないような、それこそ切るだけの料理であろうが。
爆発の威力はなかなかのもので、軽く部屋を吹っ飛ばすほどだ。
料理をするたびに厨房を吹っ飛ばされていては料理人たちは仕事に

ならないのでイレーネ専用厨房が完成した。
それでも壁ごと吹っ飛ばされるのは困るので、「エリク、ここに強力な結界を張って頂戴」などと兄に結界を張らせたらしい。
さすがに結界の維持は自分でやっているらしいが。

後日珍しく疲れた様子の兄が、

「何で母さんは料理をするとき常に魔力を込めてるんだ・・・」

と壁に向かってブツブツ呟いていた。
そんな兄をみた姉がさらりと言った言葉。

「愛情の代わりに魔力込めてみましたってことなんじゃない？」

うん、間違いなくソレだろう。
じゃなきゃ野菜切っただけで大爆発なんて起きない。
しかもかなり盛大に流し込んでいる。それはまるで食材と戦っているかのように。
まぁ俺は一歳になる頃に母から離れて兄と姉と今は亡き父と暮らしていたらしいのでその被害にはほぼ合っていない。
父も俺が三歳になる前に亡くなり、それからずっと兄と姉の三人で暮らしていた。
その頃の兄と姉は十歳ほどだから、その歳で二人で三歳前の子供の面倒をすべてみていたのだからそのときから非凡であったことが伺える。
・・・それには感謝してもしきれない。

そういえば俺が出来る様になるまではずっと料理の担当は兄だった。
まぁあの姉なら包丁でまな板どころか机まで一緒に叩き切るのが目に見えているので仕方のないことか。

・・・って思い返せば、その頃の家事全般全部兄がやっていたような気がする。
うちの家系の女は家事能力の低さは半端ないのかもしれない。

そして今、俺たちの前には色々な料理が並べられている。
料理自体は無事だが盛られている皿は欠けていたりひびが入っていたりと散々な状態だ。

「さぁ召し上がれ」

食事前の感謝の祈りを捧げ終わると、母に促され各自黙々と料理を自分の皿へと取り分ける。
ここにいる人間のほとんどが母の料理がどんなものだか知っている。
レティもさっさと料理を取り分けているので初めてではないようだ。

「おいしそう～！」

知らないであろう一人のヴァイスは嬉々として料理に手を伸ばしている。
そしてもう一人であるライゼはとりあえず取り分けた料理をじっと見つめていた。
・・・まぁ知らなければそんな反応もするだろう。爆発していたし。

そして皆が料理を取り終えたのを合図に料理を口へと運ぶ。
ライゼの伺うような視線に大丈夫だ、と頷く。

「おいしい！おもしろ～い！！」
「ふふ、それはよかったわ。沢山食べて大きくなるのよ？」
「うん！」

どうやらヴァイスには好評のようだ。
確かに味は悪くない。むしろおいしいともいえる。
ただ、やはり普通の料理ではない。ヴァイスが「おもしろい」と称したのもソレが原因だ。
ちらりと隣を見れば、ライゼが意を決して料理を口に入れたところだった。
見た目は誰が見ても普通のハンバーグ。

「んなっ・・・！？」

驚愕の目を見開くライゼ。

「うまい。うまいんだが・・・」

俺はライゼがそれ以上言うのを視線で制する。
それに気づいたライゼはこそっと俺に耳打ちした。

（（どうしてハンバーグがプリン味なんだ！？））
（（そういう仕様だからだ））

俺は即答し、それ以上の質問を却下する。
あの見た目ハンバーグは食感もハンバーグだがプリン味。
今俺が食べている魚はサラダ味だ。ちなみに匂いはやはり魚。

そう、母の作る料理は爆発するだけでなく見た目と味が一致しないというとんでもないシロモノだ。
それでいて味は悪くないというなんとも微妙な状態。
ちなみに味は毎回違って、以前食べた見た目ハンバーグはコーンスープ味だった。

フェルとターヴィは慣れたもので、堪能していますといわんばかりに、目を閉じて料理を口に運んでいた。食感以外のギャップをなくすための手段だろう。

こんなことになっている理由は、魔力で料理の味を斜め上の方向に変化させてしまっているからしい。

誰かの母親が「愛情が隠し味なのよ」とか言っていたが、我が家の母の場合は愛情という名の魔力が隠れきれずに前面に押し出されている。

どこまでも普通の母親像からはかけ離れた存在である。

３４：新たなる旅立ち

「それじゃあ今回ここへ来てもらった本題なのだけど」

次の日の早朝、やはり母に呼び出され今回はライゼを含む四人で神殿へと訪れていた。

今回フェルとターヴィはこの場にいないので呼ばれていないということだろう。

「ヴァイスとレティの件だけではなかったのですか？」

「本題は別よ。その二人の件はちょうど時が来ていたにすぎないわ」

「はぁ・・・では本題とは？」

信託の巫女である母だが、受けた信託の意味まで説明することはあまりせずに、信託として受けたという言葉のまま伝えることが多い。

今回も二人の件に関しての説明をする気はないようだ。

ならばさっさと本題とやらを済ませるのが最善だろう、と話をすすめる。

「ルッツ、あなたを信託の巫女の代理としてフォルクへの使者に任命します」

「フォルクですか・・・」

それは七年前、一夜にして暗黒竜に滅ぼされた国。現在絶賛復興中である。

「確かフォルクはまだ王位が空いているのでは？」

「そうね」

「確か前王に子供はなく、前王は七年前に亡くなってますよね」

「その通りよ」
「今は前王の弟と妹の子供達が王位を争っているとかいう噂を耳にしましたが」
「噂じゃなくて事実ね」
「ちなみに拒否権は？」
「あるわけないじゃない」
「・・・デスヨネ」

そんな王位争い真っ只中の国へ使者として赴く。
しかもただの使者ではなく、信託の巫女の使者。さらに残念なことに勇者の弟であるという事実。
前者はともかく後者は口外するつもりはないが、調べればすぐにわかることである。
間違いなく面倒ごとに巻き込まれることは必至だろう。

フォルクでも勇者は王の仇でもあった暗黒竜を倒した英雄であり、絶対の存在だ。
復興を目指す国内からは王子や王女の結婚相手にという話が当然のように出てきた。
しかし兄や姉にそんなつもりは微塵もなく、あっさりと断り戻ってきて今に至る。

王位争いが起きているが、勇者のどちらかと婚姻したとなれば間違いなく王位を継ぐのはその人物であろう。
いくら王制とはいえ民意は無下にできない。荒廃し一からの復興の真っ只中にあり、王家の力も落ちている状態であれば尚更だった。

そこに勇者の弟がホイホイとやってきたとなればどうなるか。
本命を釣り上げるための餌として利用しようとする人間がいるかもしれない。

本命の勇者ではないが勇者に極めて近い人間。それこそ下手をしたら勇者の代用として利用されることだってありうる。

つまりフォルクの王位を狙う人間から見れば俺は葱を背負ってきた鴨。カモネギとも呼ばれる利用価値満載の存在だろう。

どこでどう間違ったのか。

平穏な暮らしを求めて旅に出たはずだった。

それが今は、家にいた時以上の面倒ごとに巻き込まれている。

しかし信託の巫女の命に背くのは王命に背くとも同じ。

そもそも従わなければ、あのどこからともなく沸いて出る兄と姉に追いかけられ、愛情という名の嫌がらせを受けるのは目に見えている。

「わかりました、行きます。で、使者として何をすれば？」

「内密にフォルク国内の視察。ついでに親書を届けてもらうわ」

「親書がついで、ですか」

「ええ、王位争いに紛れて不穏な動きがあるようだから。もし必要と判断したならその火種を消して頂戴」

「重大そうなことをさらっと言わないでください。誰が聞いているかもわからないんですから」

事も無げに国家間の問題にすら発展するであろう事柄をあっさりと口にする。

それに触れれば、母はにやりとした表情を浮かべ・・・

「この信託の巫女の結界を気づかれずに破ることができる者がいるとでも？」

そう自信満々に言ってのけたのだった。

そして告げられた出発日は明日。
ライゼたちの他に、騎士であるレティが護衛として同行することとなった。
それでも国の使者の護衛が騎士一名のみというのは少ないのだが。
それよりも急すぎるだろうと思うのだが、あの母にはそんな常識は通じない。

フォルクはイェーガーの隣国で往復するのに五日間程度かかる。
あちらでの滞在日数を考慮しても二週間もあれば戻れるだろうと、簡単な準備をして休むことにした。

そして次の日、俺たちは王都を後にした。

別に隠すわけでもないが、必要以上に騒がれるのも面倒な騒動が増えるだけなので遠慮したい。
ならば普通の旅行者のように馬を使って行くのがいいだろう。王都に来た時のように竜に乗ってなどと派手なことをすればあっという間に目をつけられてしまうので論外だ。

馬で国境近くの村まで移動しようとしたのだが、馬が怯えてライゼを乗せてくれなかったので断念し馬車で移動することとなった。
普通の馬ではいくらへたれとはいえ竜の気配に怯えてしまったのだ。
その点ヴァイスは優秀で、竜どころか気配自体が希薄で二人乗りではあるが乗馬に問題は無かった。
ライゼはこんなところでもお荷物っぷりを発揮していた。この四人の中では一番体格に恵まれているというのに。

馬車ならば普通の馬でも緊張が伝わってはくるが、問題なく乗車することができた。
そして馬車の乗り換えのために立ち寄った街にヤツらはいた。

「おぉーい、ルッツ！遅かったなぁ！」

ぶんぶんと手を振るあふぉとそのすぐ後ろに控えるかのように佇んでいる騎士服をきっちりと着込んだターヴィ。
とりあえず見なかったことにして、乗り換えの馬車の乗り場へと踵を返す。
するとあふぉは慌てたかのように俺たちを呼び止めたのだった。それはそれは大声で。

そんなあふぉの声に人々が振り返り、俺たちにも視線が集まる。

「ねぇ、あの騎士様って・・・」
「間違いない、副団長様だよ！」

フェルはあまり表舞台には出てこないのであまり顔が知られていないが、ターヴィは式典などにも多数出ていたのでそれなりに顔が知られているようだ。
ちなみに現在は副団長ではなく、近衛騎士長でフェルのお守りという立場になっていて式典などに出る機会はほぼ皆無である。

「とりあえず・・・場所を変えるぞ」
「ああ、異論はないぞ」

睨み付けるような視線を投げかけて言ったのだが、フェルには微塵も気にする様子はなく嬉々として答えた。
騒ぎが起きるのを嫌がる俺と話をするためにわざと目立つような言

動をしたということだろう。
そしてあの時の笑顔の理由はコレかと盛大に溜息をついた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0920l/

勇者の弟

2011年10月6日22時34分発行